日曜日にはTVを消せ No.8

☆1976.11.14(日)

☆「マザー」～「紅い花」感想集とスタッフの制作メモ

☆制作☆PHC-TV

住所未定　藤田　眞男(MAO)
神奈川県足柄上郡大井町金手1099
池田　博明(YOTA)

●創刊2周年ということで所信表明みたいなもの書くべきだろうか。しかし改めまって云うこともないようだし、思い出話をするなら、もう少し後にした方がよさそうだ。
となると、とりあえず云い訳を少々…。

●すでに、みんなの手元にはYOTA編集によるNo.9が届いていることと思う。先に出すつもりでいたNo.8の発行が遅れたのは、準備に手間どっていたのでもなければ満を持していたのでもない。ただぼくの方が、YOTA以上に怠けていただけなのだ。

●ごく親しい人にだけ配っていた創刊号の頃に比べると、最近は1号あたり、部数ページ数合わせて約10倍に増えており、たしかにこのことも負担にはなっているのだが、それは時間さえかければ問題ない。それよりも、そうして同じ所にグズグズと停まっている内にこんなものを作って何になるだろう、と考えはじめると、ますます身動きがとれなくなってしまう。

●いま、ぼくの手元に、佐々木昭一郎と彼の作品に関する、多くの記事や評論がある。それらをまとめるだけで何冊もパンフレットが作れるだろう。貴重な資料にはちがいないが、そんなパンフを出して何になるだろうか、とまた思う。

●「マザー」～「夢の島」を試写室で再見して、個々の映像と、ぼくの記憶の中のイメージが、予想以上にくいちがっていたことにおどろいた。だが、それはそれでよいのではないか。No.1,No.2に述べたことを、今更、書きかえる必要はない。あれはあれで、よかったのだと思う。2年前、ぼくはTVで「夢の島」をみた。それをみることと自体が、一回限りのドラマといえるものだったのだから。

●さっきNHK・TVで「斑鳩(いかるが)の白い道の上に」という、大河ドラマ風ドキュメンタリーをみた。プロローグに、スタッフの姿が映し出され、その中に、演出の和田勉と立ち話をする佐々木さんも居た。とても疲れている様子だった。インド・ロケのワン・カットである。空しく流れる映像と音をポカンと眺めている内に番組は終った。
インドか…　遠いな…
佐々木さんからもらったインドの絵ハガキには、蓮の花と鹿が描かれてあった。(10/14・MAO)

まえがきにかえて

一握のチリは地にかえる。
一滴の水は海にかえる。
この世に来て　また立ち去る
お前の姿　それは一匹のハエ
風と共に来て　風と共に去る。

これはルバイヤートの詩ですけど　その一匹のハエが力メラと録音機を握れば　風と共には去らない風と共に来てのですね。

1969年のテレビドラマ「さすらい」　「マザー」

1971年の「さすらい」　テレビジョン

これらを見ると　76年の今

と云うのは意識の定着だなあと思うのですね。ルバイヤート氏に見せたいなあと思うのですね。

少年ケン、クリスチーヌ、ひろし、サーカスの人たち、フォーク、シンガー、何んだかフェリーニの人間みたいに、みんな手をとり合っているのですね。それに我々制作スタッフまでもが同じように手をとり合っている。

不思議にも私の69年71年がそのままよみがえってくるのですね。なつかしい日々、記憶がよみがえる。過去の定着が確認を呼び覚す。これはかなり重要なことなのですね。だからたえず何かを創りたいと思うのです。

実は70年に生れた私の子供。私の可愛いい子供が、最近あの「マザー」のケンとまったく同じ口のきき方をするのですね。本当にドキッとする。それは5年前のドラマを思いかえすことだけでは　私の少年時代をも想いかえさせるから　なくしてなのか。どっちにしても　新しい時間の中で別の少年が　新しい世界をもち始めたんだなあ、と思う。大人となってしまった無念さの中でもうそんなに時間が過ぎたのかと思う。

過去。現在。未来。風と共に来て　風と共に去らない番組創りを。新しい少年たちのためにも　やらなきゃいけないなあと思うのです。

（76年6月）

織田晃之祐

▼「マザー」「さすらい」で効果音響を担当、口笛もきかせてくれたのが、織田さんである。TOTAさんの結婚パーティーの翌日、友人たちと共に放送センターを訪ね、佐々木昭一郎さんに初めて会った。その紹介で織田さんにも会った。物腰柔らかなオジサンだった。本当に佐々木昭一郎のドラマの中に居そうな人にそうなれば、織田さんは、口笛を録音するとき、何人前では吹かないそうだ。

6月の試写会で「マザー」と「さすらい」を再びみて、織田さんの口笛のすばらしさに感嘆させられた。彼の口笛は、楽器の音じゃなくて、人間のコトバになってるんですよねーと佐々木さんが云う通りであった。

佐々木さんが織田さんを、織田さんが佐々木さんを語る口調の内には、一つの世界を共有している人間のやさしさが感じられた。仕事の都合で織田さんは試写には来られず、彼が佐々木さんに托した原稿を、ぼくが預かった次第です。

MONITOR ROOM

（No.7からのつづき）

★つげ義春の作品には通常の起承転結はないようなものだけどそれでもムリヤリあてはめてみると、その「結」の部分がいかにも「沼」「季さん一家」「長ハの宿」なんかでは、まさかそんなものがオシマイに来るとは思ってもみなかったのです。つまり、語り方の発見、なのだ。「季さん一家」は、普通なら、さあ、こんれから、というところで終わっているものを、それなのに、「季さんの家」のすぼるくらいの発重く静かに垂れこめてくる雰囲気に浸りこんでいる。どうしたことだろう、と思って、改めて読みなおしてみると、ここに季さん一家の「存在感」が完璧な起承転結で語られているのに気付くのだ。こんな具合にワクにはめてしまう必要もないので、くは最後のページをめくった時ぼに、ウワッとたまげたのです。

「海辺の叙景」の出だしは、まるで「ジョーズ」みたいな。こういう「恋」のでてくる話は全面的に好きなのです。ラストのこのページブチ抜き大画面は「宇宙」ペー「天地創造」「創世紀」というような、スケールを感じる。中学校の頃、大昔には地球は毎日ドシャ降りの雨だった、という話を聞いてわけもなく感動したことを思いだします。雨の日にも永遠が見えるのだ。

「紅い花」については、シンデンのマサジとキクチサヨコがダーイスキとしかいいようがない。つまり一番好きなのだ。「眠れや…」という、あんないい言葉をどうやって覚えたのだろう？

（3／2・東京・野口　信）

★仕事のために時間が拘束されて、まいっています。コメット、イケヤは見れなかった。「さすらい」「赤い花」もどうなるかわからないけど、がんばってみよう。

（3／8・東京・原田　泰）

▼「コメットー」は、ラジオ・ドラマだから、見れなくて当然なのだ。「赤い花」じゃなくて「紅い花」なのだ。原田君、仏きすぎて視聴覚に混乱をきたしているのでは？お大事に。

★ところで二月に上京されたとのこと、是非会いたかったのら。ひと声かけて鍵かけてくれればよかったのに。テッちゃんもテッちゃんなのら。永くらいのう。でも元気みたいなのでそれはイイのら。こちらも相変らず。テッちゃんとも会えばマージャン競馬の話ばかりしちょる。

（3／10・東京・佐藤芳郎）

★「日旺日ー」バック・ナンバーうけとりました。あまりの分量に圧仆されております。「夢の島少女」について語ったところは、どれも素晴しい。「批評てのは、つまり讃えることだな」（谷川俊太郎）を実践しているからなのだろう。「讃えよう」「ホメよう」とする熱気に感動するのだ。僕は「夢の島少女」を見なかったが、「夢の島少女が伝えたもの」を見た。それで満足です。いただいた手紙を読んでも、この「日テレ」が、いかに佐々

木昭一郎を中心に廻っているかがわかり、それが誌面にニジンでいるのだな、と思います。それにしても佐々木昭一郎の半生は、つげ義春的というか、大江健三郎的というか、胸ウタレず

には済まされません。

「No.4 早すぎた自叙伝・序章」

は「夢の島少女」をホメ足りなかった、というが、それがミニコミづくりの根本命題（？）へ言葉は可能か？）に重なってきて言いて、僕がアレコレ言える筋合いはないようです。率直な感想を言ってしまうと、何か僕一人極楽トンボとして取り残されたような感じを抱くとともに、ここにいわれている「コトバ」という言葉がウワツイていないとも言い切れんな、というところでした。

田村隆一の詩も引用されてるし、私も田村フアンのハシクれなので、一言いたい。

「言葉なんかおぼえるんじゃなかった」という一句は便利すぎるし、また誤解されやすい。この詩の題名が「帰途」であることを忘れてはいけないのだ。

「帰途」の行きつく先は次のように書かれている。

言葉なんかおぼえるんじゃなかった／日本語とほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで／ぼくはあなたの涙のなかに立ちどまる／ぼくはきみの血のなかにたったひとりで帰ってくる。

つまり、田村隆一は言葉のある世界にふみとどまる決意をかたっているのだ。この詩は非常に重いのだ、と思います。

更に大好きな詩をあげると

風　吹いてみる
木　立ってみる
ああ　こんなよる
立ってみるのね　木

（吉原幸子「無題（ナンセンス）」）

この詩をはじめて読んだとき、僕の眼からウロコが落ち、僕の足は地に触れたのだ。吉原幸子さんの第一詩集は「幼年連禱」という題で「無題」はその中の一篇。No.4の子ども論によせてちょっと引用すると、

「子供は子供であるに過ぎない。その姿をみて微笑み、或いは涙を流すのはいつも大人なのだ」

「私の中の幼年」

他に「永遠の百合」と題して素晴しい詩論、或いはニヒとば論も書いています。これは引用するとほとんど全部書きうつしたくなってしまう。読むべし。「吉原幸子詩集」思潮社 520円

「コメット・イケヤ」当日になって忘れてしまった（反省）

「都会の二つの顔」待っています

「ひこうき雲」毎日聞いています

M遠い波の彼方に金色の光がある　永遠の輝きに命のかじをとろう

（3/10・東京・野口　信）

▼ぼくは、コトバには云い尽くせぬ何かがしかの力みたいなものが備わっているとは思う（何だかムチャクチャ矛盾した考えだけど）のだけど、それにしても、「詩」というのはわけわからなくて、とっつきにくいのです。ゴメン。

★なんか、お久しぶりです。この間、大阪いったついでに「プレイガイド・ジャーナル」3月号買ったら、GYA氏が「紅い花」がTVになった！”という一文を書いておられました。僕はまだ原作も読んでないけど楽しみになってきた。せいぜい友人にも「紅い花」の放送を見るよう、すすめておきません。

映画の方は、これぞといった新作にいっこうにブチ当れない。「青い山脈」で注目した河崎堅督の第二作「挽歌」にもガッカリ。なんとも、めんどくさい話で、これじゃどうしようもない。もう、リメーク物はゴメンこうむりたい。久美子は、たいうヒドイの一言につきます。と、いうわけで、映画はこの間オールナイト5本立で見ていました。川島雄三のみにイカれ狂った「幕末太陽伝」「貸間あり」「縞の背広の親分」「わが町」「しとやかな獣」です。みんな好き！「貸間あり」を、川島さんと共同脚色している、藤本義一の「人肉サラダ」をこの間読んで、この本にも大感動。「貸間あり」抜きでは考えられない本。藤本さんの本では、直木賞とった「鬼の詩」よりすばらしい。「生きいそぎの記」とともに必読？の書。

（3/12・奈良・牧村利光）

★土旺日には「男たちの旅路」を見ているので続けて「赤い花」を見るつもりです。しかもその後には「刑事コロンボ」「警部マクロード」「署長マクミラン」が連続放映！うれしいなあ…5日の「コメット・イケヤ」はTBSの「恋人たちの河」が始まったため、こちらを見て、ラジオはテープにおさめました。日旺日にでも聴くつもりです。

（3/12・横浜・徳木吉春）

▼「赤い花」じゃなくて「紅い花」なんよ。しつこいけど…

★今日は、なんかとなりに山内さんいて、オールナイトでだれてる。「紅い花」は、たぶん見るでせう。「コメット・イケヤ」は聞き逃した。というよりねたのであります。ワリイ、ワリイ。なんか「月刊YAS・YAS」と、山内さんのたより。今、一緒に書いています。そこで一言「今朝はおはようを言えません」という状態でだれてます。最近の南サオリの新曲は、どげんかね。今は、なんちゅうても太田ヒロミの「モメンのハンカチーフ」につきるのじゃわい。ユーミンの「かげりゆく部屋」は狂気の唄で、あそこまで行くと、もうダメねー。早く結婚しろ!!てなムード。

★いま、YASの部屋で、セリの「遠い海の記憶」を聴きつつ「純粋桃色通信」（廃刊準備号）を読ませてもらっています。眼が重い。徹夜をするのだなのだそうです。よって、ぼくも朝まで起きていなければならないのです。レコードはキングクリムゾン―クリムゾン・キング。広島で迷子になりそうです。

広いところです。

「セブン・スター・ショー」における「ユーミン。感想」。よく月刊をひかなかったと思う。カラーTVが大変カラーTV的でありつづけてくれました。徹夜とは何。ぼくはレコードに還ります。眠れぬままむかえる朝。背中故こうもちがうのだろう。学生時代の生活が少し寒いです。いつまで活に戻った気分です。

も今のこんな状態が続いていくような錯覚が、変に快いです。あと3時間半で夜明け。ゆたかinひろしま

（3／17・広島・平田泰祥　山内豊）

★いつぞやの晩は、週刊読売のはっきり言ってじつにくだらない（それに大して金にもなりませんでした！）フランス映画のクイズ作りに巻き込んでしまって、申し訳ないことしたと思っています。白井さんのほうは、小倉一郎がすっかり気に入ったりして（この点に関してはみな同感だと思いますが）、なかなかたのしい晩だったと述懐していました。川本三郎さんは、じつに見事に、パッタリとキネマ旬報への――ひいては"映画評論"なるものの――筆を絶ってしまいました。それでも、ときどき試写会には出かけるらしく先日は「月とライオン」（ジョン・ミリアス監督）という、じつに――まあ、つまらない映画の試写会でバッタリと顔を合わせました。

佐々木昭一郎のラジオ・ドラマ聞きました。TVの創画シリーズも、ぜったいに見るつもりです。

（3／18・東京・山田宏一）

★YOTA氏が結婚するそうでヘェ？と。

「コメット・イケヤ」は聞いたけど、◎ではなかった。○である。時代が変ったと思う。S40年の時点で聞いたら、すごいショックを受けたかもしれないが、今、手法としては珍らしくない。イケヤさんに転業をきくところが、少しきつかったな。寺山修司が原作とは知りませんでした。彼はぼくと同じ、AOMORIにいた。

（3／21・札幌・西村英夫）

★この間、或る友達に「『夢の島少女』知ってる？」と尋ねたら、「ああ、佐々木昭一郎だろ」と答えが返ってきて、ひどく動揺しました。TVの三本は当然見ていて、ラジオ・ドラマも一本録音してあるそうです。知ってる人は、知ってるものなのだな、と感心した次第。

（3／22・東京・野口信）

★今日、高松NHKの人と知り合い、ビデオ・カセットの話になって、ぼくが「紅い花」のこともちだしたら、そればなどといわれた。一時間分一万円と、三十分ぶん五千五百円。一時間十分の「紅い花」――一万五千五百円。うーん、今、迷っているのだ。「花に棲む」見た。話がどうも腰くだけで、母親とのエピソードにいたっては、またかナ、の感あり。ただ多用されたな。ムスクーリのうたはよかった。

（3／26・香川・山内豊）

★ウェスト彗星、みようと思ってたがみれず。そういえば「コメット・イケヤ」再放送の頃だった。「日旺日には――」No.7は面白かった。「ヨレヨレ日記」をよみすすむうち、何度か笑い転げた。みんな表面的にはどんどん変っているようで、じっさいは相変らずという感じで生きていて、うれしいね。そういえば、ZIGGYの曲で「愛は突然に」（唄・加橋かつみ）なんてのがあったけど、YOTAさんが結婚するというのにはびっく

りした。11日は何をさておいても行くつもりだから、案外早くMAOとも「再会」できるかもしれない。

くさぶえのTV。セブンスターショーみた。ティンパン演奏するところの「夕日が泣いている」とかのスパイダースの曲ないんだてのはちょっと二度と聴けないだろうから面白かった。「あの時君は若かった」と「12月の雨」のデュエットは圧巻だった。しかしTVできいて初めてさぶ理解できたぶぶのうたがへただというのがぼくの聴覚はてんでなら理解できない。ティンパンあるのかないのの連中はやる気かわからないようなで然とした顔してるくせに突然「サマーがルル」を踊りだしたりするんもんね。くさぶぶは例によってハリキリミュージカルで全編踊りまくってるみたいで。

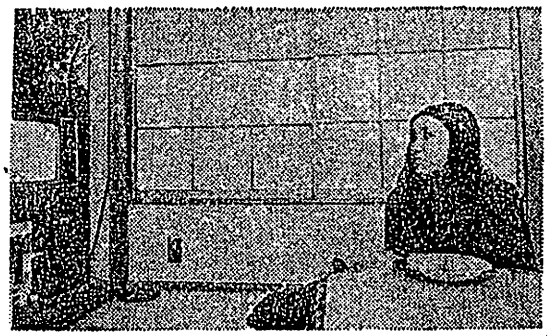
4月3日ほんとに楽しかったのは休みはとったもの算段をつけて我家はTVはなくて昔ながら電灯の光だけはカラーなしでみる。カラー化なしの白熱電球に。

末くの・螢だてのつい・パナアームスタンドが最近わやっとの

ったっ。どうも螢光灯の光は寒々としていやなのです。で「紅い花」だけど、いっそホテルにでも泊まろうかと計画中。

（3/27・兵庫・村上知彦）

▼わが下宿の友だちもTVのユーミンをみて（きいて）「へタだへタだ」と申しておりました。TVのワンマンショーやるまでに売れてしまったことについてユーミン自身は…「クチユミはネズミ算だけど、マスコミは爆弾だから」「自分でコントロールがとれなくなった今は、恐いですね。うれしいことはうれしいけど…」と語ってます。



お手製のチャーハンを食べながら深夜テレビ。厚顔の日課だ。

▲自室でTVに見入るユーミン。何みてんのかな？

★「日旺日」No.7どうもありがと。最後の頁にわたくしめの提供品がのってたりして。シミジミようこんでおります。

今日・創画シリーズオニ弾・寺島町奇譚「やってたけど・半分よそ見しながらしまいま耐えてみました。おかげで「紅い花」の予告をみることができました。努力は報われるっき秒くらいのフィルムだったけど・わけもなく素晴しかった。つまり・バニセ物とホン物の差なのだ。バックの曲がまた実によかった。ドノバンかな・よと思った。たーー瞬・自信なし。来週は関東大震災がきたって見るゾ!!

ところでうちのテレビはビクタ。のポンコツ・モノクロなのだ。「紅い花」の「紅」も見られない東京ヨのは・チト残念なり。

食い知一郎氏。一番ヨレろ日記、おもしろいたのは小人はと山・内は・箇

TV人ツんそにもうつ心ませ。ーしなこんなだ。オろ。こモロイ人からは

認所がアゾロゾロ。たのか、読みてなくなが。

敬服・反省・再

まあ、こういうのを読んでる

と、ツクヅクうれしくなります。わたくしの投稿体験をふり返ってみると、「某受験雑誌」と「某映画雑誌」だけ（深夜放送のリクエストはどっとあるけど話が別）で、ああいうのは何か、シケッた打ち上げ花火をあげてるようなもので、虚空に高々と舞い上ることはなくて、ショボショボと上って、ハイ、おしまい、の風情でしたな。それに比べると、今やってるのは、永鉄砲で永のひっかけあいしてるようなもんだけど、けっこうひっかかるから面白いのだ。せいぜい、しつこくひっかけあいをやりたいものです。

あと、いいたいことが2つぐらいあった。その一、「放送批評」読んでみました。井伏鱒二の短篇を読んでたんだけど：つげ義春の擬文語体風のしゃべり方は、そのまま井伏さんの小説にも見付かりました。それから、島尾敏雄のアダ名は、「イインキジノフ」だそうです。ハッハッハ。

その二、が何だったのか、まるで思い出せない。

（3ノ27・東京・野口 信）

▼えー、この他、シン・シアのことから、ライチャス・ブラザーズはじめ往年のR&Bのこと、エトセトラ：内容豊富なお便りだったけど、やむなく省略。それにしても、わがミニコミを、永鉄砲のひっかけあい、とはまさに云い得て妙。コトバをかえれば、「ごっこ」の楽しがあればこそ、こうしてミニコミやってられるのだろう。早い話が、ぼくがやってるのは「雑誌ごっこ」みたいなものかね。これがホント？の雑誌だったら、とっくに投げ出してたかもしれないね。

★先日は突然押しかけ、楽しいおはなし、めずらしいレコードを聞かせていただきありがとうございました。28日早朝、自宅にもどりました。旅の最後にドルフィンへ行き、食事をしてすべて終わり。28日は休み。29・30日と丸々外へ出ていて、これから大阪へたつのです。あー時間がない。

（3ノ31・東久留米・加藤周也）

▼先日、加藤さんが友だち連れてぼくの下宿を訪ねてくれました。聞けば、ぼくの方が老人なのですが、加藤クン、と呼ぶのはおこがましいような、パーソナリティ豊かなイイ人でした。4月より再就職、「ユーミン・タイムス」も次号をもって一応休刊とのこと。ザンネン…。

★お手紙に登場した、佐々木氏、小石さん加藤さんには、それぞれ改めて感心しきりました。それから「夢の島」ファンの中学生たちにも！日本の10年後は明るいよ、と一瞬思ったりして。「ドノバン」正解で、えらく気を良くしています。彼のレコードは持ってなくて、ドノバン狂の友達の家で一度聞いただけ、感じたものはたれない、ということでせうか。あいつにも「紅い花」教えてやんなくちゃ。

私の趣味は「一に散歩、二に自転車、三に靴みがき」です。何かみんな安上りなのだ。永田町をズブ濡れで歩いていて、オマワリ君につかまったこともあるのよ。

うわさに高い「ゴーゴー・ナイアガラ」はじめてききました。

イヤー・おかしかった。「今日はトロロローイ曲をあつめておくりましょう」といったかと思うと藤山一郎の「東京ラプソディー」なんか始まって、わが耳を疑ってしまった。大瀧さんサイコー。あの人のしゃべり方・あのニカモシャモシャとした口調がどMAOによく似てるもんで、大わらいしました。植村クンも推センの「ナイアガラ・トライアングル」も手に入れようと思ってます。

（3/31・東京・野口　信）

▼野口君からはいつも四百字原稿用紙で10枚近くいただき、カンゲキ。今回は速達でいただき、今回は他にロックのお話しや散歩のおはなしもきき残念です。全部紹介できないのが残念です。自転車と靴みがき。デ・ガ・シ趣味なんて、自転車とかぼい。のしゃべり方みたい!?　下宿の某氏わからは・西岡たかしは・下宿の云われ・佐々木昭一郎さんと云われ・イケデンワで話してますね・西岡たかしは・ヤさんに似たとき・ヤケれたのだが・上野市」と……。という唄をうたって

ぐらいだから、たぶん三重県・伊賀上野の人じゃなかったかな。「フカフカ」の西岡恭蔵も三重県・伊勢あたりじゃなかったかな？ぼくはというと三重県・四日市で生れ、ずっとそこで育ち、6年前・豊橋へ移って下宿生活してるわけね。すぐとなりの浜松に、「コメット・イケヤ」のイケヤさんが住んで・藤枝静男も居るのね。彼はその名の通り・静岡県・藤枝の生れで・ここは小川国夫が住れ今も住んでる所。いわゆる太平洋ベルト地帯。その中心・名古屋を「偉大なる田舎」と呼ぶ。デパートを別として・主な企業はほとんど東京・大阪・資本が占めている。革新系でも・保守党の候補に投票する人が多い。つまり優柔不断。ノホホンと生きてける風土。「伊勢乞食」という差別用語（？）もある。伊勢神宮へ詣でる旅人に物乞いする一群がいたそうだ。低開発諸国の観光地にタムロするコジキみたいなもんだろう。「高校のとき・現国の先教師は・「伊勢コジキ」伊勢子正直」がつまって「元はイイ意味なのだ・化したんであって・」と力説していたが・

ホントかね？とにかく「覇気」がない。「東海道メガロポリスのダメ子ちゃん」と云う人もいるそうである。「私の少年時代が幸福であったかどうか自分でもはかりかねるが・東海地方の明るい環境でくったくなく過ごした、という——小川国夫」のが実感だ」

小川センセのようなエライ人も住れるけれど・ウラ目に出れば・ぼくのようなダメな人が出て来るわけ。で・ようするに・しゃべり方ひとつとっても・優柔不断・アヤフヤになるのでしょう。しかし・大滝さんは東北の人なんだけどねェ。

★いよいよ4月にはいりましてあっ4/3が明後日にせまってまいりました。MAOはさぞ緊張のおもちで日夜・勉強と労働に励んでいらっしゃることでしょうね。必ず見るからな・心配すんな。えーと・久し振りのお便りのわりにはあまり話すこともないわ。話題がないのはさびしいね。では4/11に。

（4/1・東京・内海陽子）

★4月11日・12日と休みをとっ

たので、ぼくもYOTAのパーティーには必ず出席。スポニチはトップ記事として載せられなかった。4月の初めは、新番組にスペースをとるので、どうしても無理とのこと。しかし担当記者と共謀して、投書は必ず載せるようにする。放送当日はへ明日なんだけど〉カラーTVでみるため、ホテルに泊ることに決定。もちろんTVみたあとはホテルからNHKにTEL。一泊4500円でヤケクソ気味だが、ピクニックにでも行くような気分で、サテ荷物は…などと考えている。

（4/2・兵庫・村上知彦）

▼2ケ月半にわたる「紅い花」キャンペーン（？）も一段落。どれにかくホッとしています。ほどの効果があったかは、はなはだ心もとないのだけれど、まそれはそれ…と。

新聞・雑誌・ミニコミにスペースを提供してくれた、村上君、山内さん、加藤さん。クチコミで宣伝してくれた多くのみなさん。本当にありがとう。

★プレイガイド・ジャーナル'76・3月号（関西版）★提供・GTA＋村上知彦氏

『紅い花』がTVドラマになった！

村上知彦

ガロ2・3月合併号既報の通りガロに掲載された漫画がNHK土曜ドラマ「劇画シリーズ」として3月20日より3週にわたって放映される。放映順序は少し変更があり、3月20日「花に棲む—赤色エレジー」（林静一原作）3月27日「寺島町奇譚」（滝田ゆう原作）4月3日「紅い花」（つげ義春原作）それぞれ夜8時より9時10分までの70分。各作品ともいくつかのエピソードを集めて脚色してあり、必ずしも原作の忠実なTV化ではない。

なかでも特に注目されるのが、4月3日放映の「紅い花」だ。演出の佐々木昭一郎は「マザー」（69）「さすらい」（71）「夢の島少女」（74）をつくったNHKの単発TVドラマ演出家だが「夢の島少女」がぼくの友人間で大きな反響を呼んだ。ぼくは仕事中で画面を眺めていただけだったが、友人達はこのストーリーやセリフを切り捨てた無意味のドラマに（夢）の世界を見、つげ義春との共通項を敏感に臭ぎとったようだ。ともあれぼくの友人の文章を引用してみたい。

「昭和49年度芸術祭参加TVドラマ『夢の島少女』をみた。これがどうも、つげ義春の『紅い花』を下敷きにしたか、或いはインスパイアされたとしか思えない作品だった……さて、どう似ているかといえば——まず、ラスト・シーンを見ながら、これは『紅い花』かな？と感じた。少年が少女を背負って埋立地をおぼつかない足どりで歩きつづけている。カメラは二人の周りを施回しながら上昇し、そして不安定なヘリ・ショットへ続きどんどん遠ざかって行く。『紅い花』のラスト、地平線の傾いた小さなコマにそっくりなのだ。構図だけでなく、二人を捉えるカメラ・アイ（作者および我々との関係（無関係）まで同じである。すなわち、オカッパの少女を背負って花畑の向うを歩いて行くシンデンのマサジのやさしさは（内に向って開かれている）が故に、我々にとっては関知不可能なものであるということ。『夢の島少女』と『紅い花』は、その表現を支える（まなざし）において同質の作品なのだ…」（ガロ75年2月号読者サロン藤田真男君の投稿）

このラストシーンはぼくもみた。ぐんぐん遠去かるカメラの速度に圧倒された記憶がある。少女を背負って歩く少年の姿はいわれてみれば「紅い花」に見事にオーバーラップする。しかし佐々木昭一郎自身の言によれば「夢の島少女」を撮っているとき「紅い花」のことは頭になかったそうだ。

佐々木昭一郎とつげ義春のそもそもの出会いのキッカケは「さすらい」撮影終る後、スタッフの一人がガロの古本を持って来て「紅い花」を読むように佐々木氏にすすめたのが最初。佐々木氏自身はその後つげ義春に会った印象をつぎのように語っている。

「私は、つげさんに一度会ったことがあります。私は、私と同じ神経症（人の顔が見られない）をわずらった人である事にいっぺんに気付き、また、つげさんもそのようでした」

同じ（まなざし）を持つ二人の作家が、本格的にドッキングして行われるこの作業、見逃すテはないと思うのだ。これは単に「紅い花」のTV化というのでなく、つげ義春の世界のTVにおける展開と考えた方がよいだろう。

原作＝「紅い花」「沼」「古本と少女」ほか、出演　私（つげ義春）＝草野大悟、少女＝沢井桃子、マサジ＝渡辺克浩、出版社のオヤジ（青林堂の長井さん）＝藤原釜足、老人＝嵐寛寿郎

なんらかの形でこのドラマにたいする印象を集成したいと思っているので、見た人は感想をプレイガイドジャーナル気付、村上宛送って欲しい。集成・公表の方法は未定。

★こちらのイベントも終り・そして待望の「紅い花」を見終えた時点で返事を書くのだ。「紅い花」「沼」「古本と少女」がアンコになっていて「ねじ式」が皮になった構成。どう言えばいいのだろう・つげファンの一人としては・あのコマが等質のまま映像化されることを願う気持ちが抬頭してきて・お

ちおち見てられなかった。というのが正直なところ。テープを聞き直してみたけれども、まだぼくの中では佐々木版「紅い花」はゴチャゴチャしている。どうも時代設定が邪魔をしているようなのだ。かといって、それをとっぱらうわけにもいかないし：実際、罪つくりだよ。今、理性を失ってるよ。面白かったとか面白くなかったとか、そういう断定も全然出てこない状態。

海へ行きつくまでのエピソード――「紅い花」「沼」「古本屋」が、意訳的にだろうか少女の順序で人里に近づいてくる。最後に「私」が「もう一度返してやろう」とか言うのが、ぼくがジーンとしたところ。もうそのあと地点では「私の妹」という枠から放されていて、ひとりの少女の自由な時を歩む空間が見えてくるといった風な感じ。それが海へと向かう移動シーンとなって、「ひろがる」と、ま、呟いたひろがるのです。

うまくいえない。ならば下手くそにならいえるか。それもいえない。川の水面とレールの移動シーンとドノバンとJ・デンバーと、ギター曲がこびりついていて、それらが、ぼくの遺失物を探しに行けと誘うものの、ただ呆然とするばかり。探しものは何ですか、と聞いても、らえた方がまだ幸せというもの。もう少し時間を置いて、テープを聴き直してみる。

No.7について。よく作りましたなー。「東京ヨレヨレ日記」など、自分のことがどう書かれたのかと、読み進む気持、まるで合格発表の掲示板を見る時のようだった。MAOのこと細かな記憶には脱帽。ぼくは常に、記憶している物、人、風景などには何らかの感情が付加されるから、あいう風に硬質に、ピンで止めるように書けない。だから、MFSに、全て書けなかったのだ。"話がうまく通じなすぎるようなところ"たしかにありますあがっている時でそんなことばかり起る場合もあります。全然ないこともあります。

MAOが見た彗星のこと、実はぼくも高松シネ・クラブの仲間から話だけはきいていて、見ようと思っていながら眠ってしまって、ようやく見られなかった。またも残念。MAOの想像通り。それから丸亀沖のイン石は村山さんの熱意もむなしく、発見されずに捜索中止。もう眠くなった。ねるよ。三時なし。

「深夜営業」はじまるなし。

（4/4・香川・山内 豊）

▼加藤周也さんと会ったとき、No.7をみていわく「ワァぼくの出した手紙全部のってる。ニリャ、ヘタなこと書けないなァ」と。また、ある人いわく「私信を公開するなんて悪シュミよ」。当PHC・TVにはTVコードなんてないけど、一応、自主規制は行なっておりまして御心配なく。"評論""原稿"というつもりは、あまりない形で文章を集めることになる便りを書き写すというこ。

しかし、会った相手の話しぶりとについて、云々したのは、自分とアサハカだった反省。はしてい、ただ、恐がるほどの程度意訳なこ関係におい、あがっく鈍感な対人ってい風なこ。ろがあっいにもみせずにいっしょうけんめいしている山内さんのように

は人と対することができない。ピンで止めるように、人間をみてゾッとしないでもない。我ながらゾッとするのだとしたら、コレクター時代の後遺症少年、昆虫少ぬけきらないのかねェ……。もっとも、ぼくが記憶に妙にこだわりをもちはじめたのは、コレクター時代が一応終った、高校生の頃バカげた記憶の反スウ運動の訓練をやったりした。

つい最近、野口君にすすめられた「吉原幸子詩集」を読んでみて、彼女も、ぼくと似たようなことをやったことがあるとか、妙な反目の感で、兄弟の間にある、妙な反目の感情みたいなものを感じた。反目というのとは、少しちがうな。近親憎悪でもないな。この辺の事情は、兄や姉のいない人にはわかりにくいかもしれない。小川国夫が「青銅時代」を書いたと思うが、何かの中で書いてがうかが、弟は兄とはちがうタイプの本を選ぼうとする。そういった感情かもしれない。女であり母である吉原幸子とは、ぼくとでは、更に感情のギャップ。

があるのかもしれないし……。

自作を語ったNOTEなど。

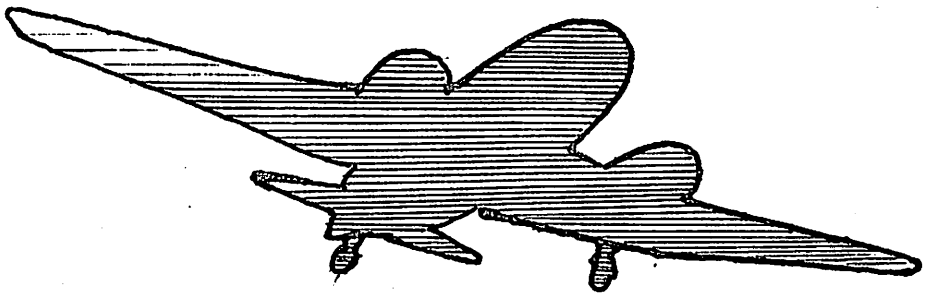
"へ大人にならないで下さい！"

とせがんで下さる少年ファン"へ親切な注告のつもりなのか、ぼくは好きになれない。「子供は子供であるにすぎない」と、はたして云い切ってしまっていいものか？彼女は"少年ファン"への対抗上、必要以上に、こういう云い方をしているのかもしれないが……。いわゆる「童話」の体験からしていわゆる「子供」が主人公となった童話や映画を、ぼくは彼女とかなりちがっている。

がこのように、こわがったりかなしんだりして読んだりみたりきいたりしたことを覚えている。それは、たしかに、吉原幸子が云うように、子供であったかも私が大人の世界を垣間みて、部分もあるにはちがいないが……。

なんだのだ、という子供とは、大人とかどうかが、線を引けるものでもなかろうが。「家なき児」や「小公子」をドキドキしながら読んでもらったという小川国夫の方が、ぼくには近しい。

「子供にとっては、高級な文学的な童話より、マンガあたりがいいとこなのだ」と吉原幸子が云う。その幼年マンガ体験を手がかりにしたのが、清水哲男「スピーチ・バルーン」だといえようか。



先日、佐々木昭一郎さんと会って話していて、彼の〈記憶〉なのこだわり方が、吉原幸子もいへのもみたいなじゃないと遠くの及ばない〉と改めて知ったいたのだが――子供の頃を巻き戻しNHKの入社試験ばかりか、十数年も昔〈の面影、ひとつひとつまではっきり記憶しているほどだからあとは推して知るべし――その佐々木さんにしても評論家から〈幼児〉に擬せられたりすると、見当ちがいと感じる、と語っていた。

なんか、支離メチャクチャに脱線した駄文になってしまった。

で、たった今、ゴロ合せ的に思いついたことを書けば、「のうスピーチ」や「フクちゃん」が、「バルーン」の主題そのものが「原作」ではないのか？　とよいうように、「紅い花」の「紅い花」の「原作」じゃない、と考えてみる。

佐々木版「紅い花」は、清水哲男だけの記憶であり、なおかつ、誰のものでもない。

ここまで書いて、いくぶん後悔している。「スピーチ」を殊更「幼年連禱」と比較対照させたりしたのは、いささか不本意なこと。各々の印象を、勝手に歪曲させたのは否定できない。けれど、書かれたものを読むということは、そういうことも起り得るわけだから仕方ない。吉原幸子のように、自作解説ノートなど、このようなおのこと、書くべきではない、と思う。清水哲男の方は書いていない。

と書いてしまって、また考え直さねばならない。作家が自作を語ってはならぬという根拠はどこにもないし、埴谷雄高や小島信夫のそれなどは、作品以上にわかりがすぎるとか、作品以上にわけがわからんといって認めたがらない人もいるけれど、ぼくは好感をもっている。

「僕は埴谷さんに聞いたんです。埴谷さんが、自分の文学を熱心に解説しろというんですか。だから僕は、はいそうですしますというふうにまでは受け取らなかったけれども、そういう影響があるかもしれませんよ」と、小川国夫も云っている。

昨年、うちの大学へ小川国夫が講演にやって来て、ぼくも彼の話をききに行った。ちなみに小川が同人誌「青銅時代」を創刊したときのメンバーの中に、彼はうちの大学の講師がいて、何年か詩人だったのだけれど、自殺した。

前に失踪し、自殺した。佐々木さんの話しぶりと、小川さんの話しぶりが、とてもよく似ているのだった。決して饒舌というのではないけれど

話し出すと、とりとめがない。小川さんは「作家」といわず、「文士」と自称するが、それがイヤミとはきこえないし、韜晦ともみえない。佐々木さんも、それと似た云い方をする。そして、自作を語ろうとして語り切れず、「うまく云えないけど」と、佐々木さんは、しばしば口にするのだった。

「私の立場からすれば、書くべきことがある、というよりも或ることが書くべきことになる、という具合なのだ」「感覚にとって、書くべきことになった物を書こうとする。いわば、出会いが肉塊になっているというこだ。言葉の本来の意味でハッフ・ニングなのだ。表現の失敗はその時の感じを掴みそこなったということだ」という小川国夫の書き方と、佐々木昭一郎のTVのつくり方も、どこか似ているように思える。

「うまい短篇を書く必要はないが、自伝を丹念に書けば、書くことは決して尽きることはない」と小川国夫は云ってるけれど、佐々木さんも、小説はムリだけど、自分の記憶ならいくらでも書けます。と云っていた。

で、その自伝の一部を聞かせてもらったのだけど、とりとめなく興味尽きない話でした。また先号でコピイした「深い川」のようなマカフシギな物語のアイデイアも尽きることなく湧きあがってくるそうで、いくつか風変りな物語のプロットも聞かせてもらったが、これまた、ひどく面白い話だった。「ピアノの墓場」の話、ビデオ・テープを持って家庭訪問して回る男女の話、「手は手、足は足」というの妙なタイトルのラジオ・ドラマの話etc。そんな話をいくつかまとめるだけで、二三冊の本が出来そうな勢いなのだ。佐々木さんと話していて、ナルホド天才とはこういう人のことなのか、とぼくはつくづく感心したのだった。

しかし、どうでもいいけど、ぼくのこの雑文、全く雑文だね。ほどほどにして、次のお便り。

★「花に棲む」は大谷直子・篠田三郎が出たので当然TVの前に正座。途中から用事を思いついて終りまで見られなかったの

が残念。2作目の「寺島町奇譚」は秋吉久美子が出るので見るつもりだったけれども、その時間になったらなぜかガタガタ雑用をはじめ、TVの前に一度も居なかった。

つげ義春のまんがを読んだことがあるかしら、と考えてみると、名前は有名で、絵を見せすれば、この人が書いたのかとうなずけるはず。さて、4月3日。家族4人でガヤガヤ話していて気がついた時には、時20分。チャンネルを合わせると、鮮やかな画像。しかし、感覚的というのかしら、私にとって苦手な部類のドラマなのです。色彩とい出演者といい個性的で良かった。きっと終ろまで見おえれば一つの感じがつかめたはず。この日、残念ながら、ひどく疲れていて、集中力散漫。10分ほどでTVを消してしまったのです。ああ藤田さんには思いことをしてしまったな。

（4/3．神奈川・金子紀美子）

☆「紅い花」は、大体、みましたよ。大体というのは、あの前日より、母が寝こんでしまって：あの日、私わが帰ったのが時きっかりくらいで：なんていうか、洗いものとか、片づけなどをやらされてしまったのです。まあ、早い話が、TVみながらいろいろやってたわけ。

私が「がロ」をよんでたのは小学校の5、6年の頃。白土三平が好きで「カムイ伝」だけがお目当てだったんです。つげさんのは、だから、あんまりよんだことありません。だから原作ウンヌンはぬきで、ヒロインの女の子が賢こそうなのが気に入りました。戦争体験もない私には、ピンとこないとこもあったみたい。私は今の家に16年間住んでるし、前の家は、ここより都会の下町のとこだったし、幼ない頃と現在の境がないのです。子供とおさらばしきれてないんですよね。だから、幼ない頃に郷愁？こもあまり感じない。

さて、はなしはかわりまして4月11日のTOTAさんとこのパーティーには行かれるのでしょう？それで、4月12日（月）原宿で「ワンウェイ・チケット」をみませんか？TV「遠くへ行きたい」で放映中止になった、竜也さん主演のフィルムです。これのディレクターの佐藤さんのご好意でみせていただけることになってます。

（4/6．兵庫・津田裕子）

☆春が来たというのに小生の身辺は相変らずパッとしません。近所の園芸屋から買ってきた永仙などをながめて、ほっとためを息をついたりなどしています。花などのように動かないものに心ひかれていくのは年とった証拠のようです。映画やTVのように動くものに、いまひとつのりきれません。

佐々木昭一郎氏の「紅い花」見ましたヨ。さいご、"おまえたちを森に返してやろう"といったあと女の子や男の子たちが森へ消えるようにいってしまう所では、ふっと感動してしまいました。キム・ダービーの「不思議な村」を思い出しました。なぜ森なのか。そのあたりが出ていればとも思います。都電の前から、走るレールをとらえたカメラにも驚きました。それにしても、こういうドラマのためにはわが家もカラーテレビを買わなくては。

山田宏一さんの本が出来て、読む前から"心とまめいて"い

ます。あの人の、謙虚さというのか、はじらいというのか、がとても好きです。
池田君の結婚、なによりも祝福します。次はだれだろうね。
などとカミさんと話してます。
（4/6・三鷹・川本三郎）

☆「紅い花」RP、ありがとうございます。つげフアン（熱狂的なし）からはやられ、つげも僕も知らない人からは「こんなテレビ見たことない、さすがー」とほめられ、驚かれ、テレビ・ドラマとはこういうものだ、という大方の人々からは「難解」ときめつけられ、僕を良く理解してくれる人々からは「幅がひろがって、今后のために良い」と云われています。大混乱。
「夢の島少女」が、誰が何と云おうと、私自身（オリジナル）の中からわきあがったドラマであり、私テレビであったことが4月3日（放送后）、お分りいただけたと思います。その接点が、藤田眞男「夢の島少女」であり「紅い花」でありましょう。ぼくは、「具体物」＝演出、と呼吸しただけなのです。それが「夢の島少女」でした（うまく云えませんけど）。

甘えず、おもねずやります。共共、いろいろ健斗しましょう。
（4/8・東京・佐々木昭一郎）

☆「紅い花」見られませんでした。東京にいたんですけど、友人のところにTVがないのです。残念！YOTAさんは結婚・TMSUさんはサラリーマン：北海道は4月だというのに雪が降っています。
（4/9・札幌・鉄屋彰子）

☆「日旺日：」No.7たしかにうけとり、いろいろ思いながらよませてもらいました。読んでいくといろいろと興味をもたしてくれます。思いかえせば、ギャビン・ライアルを知ったのも、君のミニコミでしたっけ…ここでなんといいにくいんですが、かの「紅い花」を15分ぐらいみて、ついていけなくなり最初みていた「刑事バレッタ」へ帰ってしまったのでした。どうも、私には、つげ義春はえんがない感じであります。私にとってマンガの世界といえば「鉄腕アトム」などで代表される世界なのであります。
（4/9・千葉・斉藤　等）

▼鉄腕アトム

闇のなかで
ひとは真ッ直ぐに歩くことは
できない
箸箱のなかで朱塗りの箸が
土鍋のなかで豚肉や花野菜の
玉が
充実しながら崩れていくように
ひとは暗闇のなかで
色を失ないつつも　なおやみ
くもに
進んでいくしか方法がないか
らなのだ

ちなみに
手近にある箸箱を手にしてみ
よう

ちなみに
ひさしぶりの土鍋を囲んでみよう
蓋をとらずに息をつめている
と
闇の中で鳴っているのは
二本の箸ではなく
豚肉や花野菜の玉でもなく
それはぼくたち自身の
色褪せた生活の音であること
がわかる

その箸箱を握りしめ
その土鍋をみつめることが
そんなにも嬉しいことだなん
て！
みどり・ごはんをとがらせて
テレビ・セットの闇のなかから
極彩色のアトムが出現するのを
待ちかねているのだが
彼ないし彼女が
すでに失った色彩を保護色に
して
アトムが闇のなかで暮してい
ることを
やがていつかは
いやでも知ることになるだろ
う

だからアトムは十万馬力で
闇のなかへと真ッ直ぐに消え
てしまうこともできるのさ
「みなさん、さようなら」と
いいながらね
だからぼくたち家族は
土鍋の闇へと箸を真ッ直ぐに
突きたてかねて
いつまでも蓋をとらずに黙っ
ている
そうやって暮していくことに
すっかり慣れてしまったかの
ようだ……

―「スピーチ・バルーン」より

☆ぼくの囲りに、一人、「夢の島少女」を見ていた青年がおりました。「紅い花」も見たそうです。どうも年代が邪魔していた、とのこと。「夢の島少女」ラストをよく覚えているそうな。林誠一郎氏は「紅い花」を見た後で（つげさんの作品は読んでないから）、奔放なイメージに驚くとともに、「沼」のエピソードあたりにおける圧縮されたセリフにハッとしたそうです。一言で、こんなにも多くのことが言いきれるのか、と。それから林氏は佐々木さんと同じぐらいの年恰好だから（推量です）

「失くしたもの」を、見ていてひしひしと感じたとも。あと、見るよう頼んだ人も、都合で見られなかったり、忙しくて部分しか見ていなかったり、モノクロTVだったり……でした。ぼくとしては、「マザー」「さすらい」「夢の島少女」を早く見たい。つげさんの枠を意訳しないで見られる、佐々木さんの世界を見たい。

7月末の「小説現代」〆切まで、なんとか、50枚の作品を書き上げようと思っているから、MFSはそれからのこと。いろんな人に出会って、いろんな話をして、今はそこで感じることを蓄積する時間。あせりはない。

4/11、YOTAさんご夫妻を囲む会、楽しくやって下さい。みんなによろしく。

（4/10、香川、山内　豊）

▼地中海岸を単車で旅行した時、シシリー島のシラクサに四・五日滞在したことがあった。（略）私はなにもしなかった。なにも考えなかった。なにも出来なかったし、周囲から眼をそらして自分の中へかえるようなこともなかった。

私を一つの分数とすると、分母と分子が同数になった感じだった。ただ、あそこにあった建物も敷き石も馬も人も網膜に残った。空気にとけていたにおいまでおぼえ込んだ。夏は孕みの季節だというが、少なくともあの夏は、私にとって孕みの季節だった。

―と、小川国夫センセも云うように、何もしないで、ポケーと、地中海といわないから瀬戸内海でも眺めながら日を送ってみるのも、またいいことでせう。

☆はじめまして。「―消せ」をどうもありがとう。

佐々木氏の作品、TVのものは「おはようぼくの海」「マザー」「さすらい」「夢の島少女」と見て来ましたが、本当にこれで全部なのですか？「おはようぼくの海」＝「マザー」で大変な感銘を受けたのですが、以後の作品は佐々木氏の名前を発見して見たというのではなく、偶然、というほどいいかげんでもないけれども、まあいつものテレビドラマを見るような感じでチャンネルを合わせたようなお訳です。でも番組が始まって五分もたたないうちに、ああ「マザー」の人だな、とすぐわかりました。

さて大変な感銘を受けた、と書いたものの、一体何を覚えているかという点については甚だ情けないことになってしまいます。第一回放送が、12月28日というのは意外でした。そんな暮の頃に見たのかな、という感じです。確か秋のある夜、疲れていて眠気をがまんしながら見たような気がしていたら、これがきっと「さすらい」の方―という具合に、全くゴチャゴチャになってしまっているのですネ。

ここ七、八年、メモ風の身辺雑記調の文章（日記ではないのがいいところ）を毎日書いています。だから放送日のものを引っ張り出せば、きっと何か書いてあるのだけれども、過去のことを資料というように、扱うのが厭なので、敢えてそんなことはしません。

で「―TVを消せ」No.1を読んでみると、やっぱりはっきりと覚えているのはラストシーンです。佐々木氏の作品は、いつも音楽が最高だから、それと画面とがピッタリ決まっていたあの場面は感動的でした。

それから横倉健児が、婦人警官か家出人相談所か何かの人につかまって、尋問されるみたいに色々聞かれていた場面を思い出します。「どこから来たの？」「名前は？」「ケンちゃんって、いうの？」「髪が長いね、本当に男の子かしら」―こんな会話があったのではないかな？見ていた僕は、これはいったい何なのか？フィクションか、それとも実際の取り調べの盗み撮りか、それにしても変ったドラマだ、などと考えたものです。外人の女性とケンが、買物をするシーン。店に歳とったおじさん？がいて、風船かケン玉か、何かそんなものを買ったと思います。今、思い出すのはそのくらい、一言で言えば「よかった」に尽きる。

「さすらい」はこれまた大して覚えていません。あれが栗田ひろみだったとは、全くびっくりしました。はっきり記憶に残っているのは、変なところで、

終り近くはみだし創場（この覚名前はNo1で知ったものであり え ていた訳ではありません）の人々が活躍する場面、チャンバラの前に確かに義をきる場面があった。その時のせりふの一部が、どのところまで出かかっているのだけど、どうしても思いせません。

あとは記憶まちがいでなければ、誰かがギターを背にかかえて歩く後ろ姿、友川かずきが演じたという兄キ分が誰かとけんかをしている……いや、こうなんかあるとふやなのだが、最初の方にポルノ映画の広告が出てきて、NHKがこんなのを許すのかと思ったような気がする……それから踏切の場面があって、それが確か電車田急電車だったのだが、そうなそして田急電車だったようなそして思いその場所が代々木八幡だと思いこんだりーーだんだんわからなくなってきました。

それで結論を言うと「よかった」。

「夢の島少女」は、ずいぶん最近なのに、前の二作以上に覚えていないのが不思議です。再放送がなかったからにしても納得行かず、これはその前後に僕の身辺に何か重大事件があったためだろうと解釈しています。けれども覚えていない「重大事件」なんてあるのですかね？わが級友、野口信君と違って、長島引退で心を奪われていた、などという事はありえません。まあ引退日にはずいぶん感動したけれども、私は生れる前から、アンチ巨人、阪神ファンです。

「夢の島」のことは No.1に詳しく出ているので、記憶を辿りながら読んだのですが、何と辿るべき記憶がないので呆れてしまいました。読んでいて思い出したのは、少女とお婆さんのシーン。ラストシーンもあいまいで、何とも言えないのが残念です。

鮮明に覚えているのは、遠くを見つめている時の少女の瞳、それから横倉健児が大きくなったのにびっくりしたこと、本当に同一人物かと疑ったくらいでした。

これも「よかった」ーーでもですよ。MAOさんには悪いが、僕の趣味は、「マザー」の方です。これと言った理由があるのではないから「趣味」と言って逃げてしまうのです。それに「マザー」の方が5年も昔の作品ですから、それだけ僕の心の中で美化されてしまっている訳で、続けて見たらどう思うかはわかりません。

もう一つラジオで「おはようインディア」を聞きました。最初の放送ではなく、再放送です。これにも横倉健児が登場、インドからの女子留学生がイラ・メータという名で、こんなことも不思議に覚えています。「マザー」の外人女性とのやりとりに似たところが大分あったようです。後半、イラ・メータさんがインドに帰らなければいけなくなって、別れを誰かに言っているところがあり、その時涙が出てきました。ラジオで泣いたことは殆んどないので、印象に残っています。

さあそうなると惜しいのは「コメット・イケヤ」ですね。三月五日に放送されたなんて、ちっとも知らなかったので、聞き逃しました。一年半ぐらい前から、ラジオ・ドラマを聞かなくなっているので、仕方ありません。野口君ともっと早く、佐

佐木氏のことを話しておけばよかった、と、後悔しきりです。

さて「紅い花」――などの不評の声が聞かれそうな気がしますが、そんなことはない。美しい作品だったと思います。まちがいなく一つの世界があったし、全体がかっちりした輪を描いてありふれた言葉で言えば「詩情あふれる」ドラマと言えるでしょう。でもせりふはダメですね。佐々木氏の今までの作品をシェイクスピア以上に思い返し、映像とかシナリオ登場人物の素人っぽいせりふが物を言っていたのだと、改めて認証しました。それから佐々木さんの好きな少女のイメージ、それに彼の分身とも言える少年のイメージ、いつもよく似ていますね。そんなことを思って、楽しかったです。でも本当によかったとすれば、二年も三年も過ぎてから、初めて僕には語れるのではないかと思います。「マザー」や「さすらい」のように。佐々木氏の作品は総てそれを要求しているような気がします。「私は『記憶』をノスタルジーと考えた事は一度もない」と彼は言います。僕は半分はそれに賛成したいし、半分は反対したいのです。記憶は美を作る行為である、と僕は思います。未来の輝ける希望、未来の美しさを僕は信じません。記憶することの楽しさはかなさを好むからこそ、佐々木さんの作品に感動するのでしょう。だから「マザー」「さすらい」「夢の島少女」を再び完全な作品として見たいことは勿論なのですが、恐いような気持もちょっぴりあります。

最後にひとこと、こんなことを言う僕だからわかってもらえるでしょうが、送っていただいたミニコミを読んで一番心に残ったのは、昔のテレビドラマの内容を、おぼろげな記憶に頼って、あ、ではなかったか、こうではなかったか、と思い出している君たちの姿でした。これこそ正に僕の愛する佐々木昭一郎的世界の入口ではないだろうかと思います。

今後もよろしく、会えるのを楽しみにしています（前言に反し、未来に期待しています）。

（4／19・相模原・今西由紀夫）

▼さて、今西君からのお便りにまず何から応えようか…ウーン一言でいって、感慨無量、とでもいうか。

「紅い花」放送前後、三回にわたって佐々木さんからTELをもらい、通算2時間ぐらい、実にいろんなことを話し合った。佐々木さんが「マザー」や「さすらい」のことを話してくれると、ああ、そんなシーンもあった、こんなやりとりもあった、と、すっかり忘れていたはずの記憶が不思議によみがえってきたことに、ぼく自身おどろいてしまった。記憶とは不思議なものだ。そして、佐々木昭一郎のTVがみる者の記憶におよぼす作用も。

「藤田さんがNo.1に書いたことは、すべて当たっています」と佐々木さんが云ってくれた。書いている時には、直感と独断だけを頼りに、当り外れなど意に介せず、勝手な思いつきと、あまり自信もてない記憶をつな

いたで行くことに熱中したのだっ
かしそれが自分で云うのも
からしいが佐々木さんを知っても
後ずっと読み返してみるとそ
の当てずっぽうが当たっていたのだ
したっていたりしていたのだ。
NGでは例えば我がドラマの
ふくは書いたけど、佐々木さんは
つうならNGとして廃棄しては
てしまうフィルムを今なおすべて
また秘匿(?)している。そうこうする
彼は撮影に際し、カチンコを使う。
わないという。それから、ぼく
ジが連想したイメ
ー「夢の島」のラストに
ー・ラッシュしていたという。
じめ、少年と少女のヘリ
ストから、レールが天に
ストを考えたそうである。
記憶のことに戻ると、「みて
るそばから、どんどん忘れてた
みたい」という、YOTAの発
言も、佐々木昭一郎のドラマの
特性を云い当てていたような気
がする。あり得ないことのように
に思えるが、そういうことが起
るのが、佐々木昭一郎の世界で

はないだろうか。これまたぼく
ばの独断だでしかない
更にへ記憶ていないが、
すこったとへ記憶思う。
考える時が、のだと世界たが、
することは、何とないう。
考えてみるとなら、もの
それは、ほとんどゼロに等しい
といえる。いかえれば、「夢
の島」の世界がいかに
の呼び出しにおいて
の経過に反比例する。
える時間は遠い記憶
失物へなどの場所
ち物へあるのはずのない
記憶であるはずのない
人へのあるはずのない
の記憶であるはずのない
へ深い記憶
へ遠い記憶
へとい
う
みたいなことは
の深度なのである。
「マザー」のこと
うとするのは容易ではない。
思い出せないことは、ぼくの内の記
憶の、妙なことに、ぼくはない部分
から、それほど深くなってくる
ような気がする。
がたっているにも関わらずの時間
る。それに比べ、「夢の島」の

方が困難であり、具体的に思い出すことが
つなぎとして深い思い出せるにしてもこの
ここんがずっと考えるようだ。
ここんなっていることは、ぼくに
通りに云ってのもてい
感じられる。そのようなるがら、
ことできないまま、それをうまくある記憶
いこと云う具合に、夢か現か幻か：
いこと云う具合に、夢か現か幻か：
出へと判っていに入り乱れている
へと判っていに入り乱れている
へ記憶のだが。
へ記憶佐々木さんのいえば、思う
へ記憶佐々木さんのいえば、思う
へ記憶佐々木さんのいえば、思う

来事にきまっていますよ。だったら、生まれる前の記憶がいちばんはっきりしていても、不思議はないでしょう」

――中井英夫「黒鳥譚」

本誌No.1を佐々木さんに送ってから、ぶ厚い封筒で何通ものドラマを作った佐々木さんの返事をいただいている。あのドラマを作ったのか、これほどスゴイ人物ないうか、と、TVをみたとき以上にウロタエてしまった。その内容のせいもあるし、また、何が何やら気も動転していたから、よけいストイックになり?、いろいろ思い悩んだ結果、佐々木さんからの私信は絶対、ここで公表しないと決めた。たとえこんな心の中だけにあるモヤモヤ、ミニコミでも、佐々木さんの制作過程を文字にしてしまうことは、あのドラマを裏切ることになると思ったから。

時間がたったからというのではないが、今になって、〝時効〟にしてもよいという気持だから、(佐々木さんには無断だけど)前号につづき、今回また、ほんの一部だけ引用させてもらいます。

☆……今、想い出したのですが「マザー」と「さすらい」で口笛を吹き、効果音響を受持った織田異之祐が、藤田さんにそっくりの事を云った事があるのです。彼は、「マザー」「さすらい」の放送后、見た人が自分なりの感性でストーリーなりを作ってほめているが、あれはきっと、「記憶」の共通点なりがなせる業だろう、この際、作者の佐々木は関係ない、それが作すばらしい記憶だ。イミの事を云った記憶が私に残っています。どうも、うまく云えませんけど、私は今、言葉を発見したわけです。見る人の発見ほど「体験」となる、こんなすばらしい事はないんです。勿論、私は作者に違いありませんけど、あれを見る事で、一つの世界、というか、つまり作者が生まれたのだ、と思います。

(75/2/12. 佐々木昭一郎)

☆佐々木昭一郎のドラマ世界に対する暫定的なメモ(エ)

①「都会の二つの顔」「紅い花」

☆出会いの物語(人間がお互いを知り合うのは、どのようにしてか。属性をすべて取り除いたとき、裸の私⇔人間的本質とは、社会的関係の総体である(Marx)この両者とも同じことを言っているのではないか。

☆少年(青年)と少女によって構成される世界。(創)と(相互侵食)の相互(都会の二つの顔)。60年安保残党・福田善之に(労働)コンプレックスは無かっただろうか。吉田喜重の労務者幻想と世界を通底する少女。佐々木昭一郎「紅い花」の少女のエピソード

②「紅い花」川が海に通じているのは(記憶)が(神話)に昇華されること。「紅い花」「沼」「古本」と少女」と「海辺の叙景」(つげ作品中もっとも リリカルな絵巻)の少女の違い。「とてもステキ」と叫ぶ「海辺の叙景」の少女は何故(不在)なのだろう。すべてのエピソードがどうしてなければならないのか。(戦時中でのみられる(時間)からの解放。(決れ)が常に外から(強制)されることの不満。つげに

もしくは〈無時間性〉と、佐々木の〈あのとき〉への執着。〈時間〉は、経験される事物である。…とめちゃくちゃなメモはここまで。TV「紅い花」を論じようと思いつつも、どうしてもつげ義春の方に眼がいってしまう。つげの作品を知らない人のがあのTVは面白かったのではつげ義春については、考えれば考えるほど解らなくなります。つげ作品中もっとも好きなのは「紅い花」次は「海辺の叙景」。「ねじ式」「ゲンセン館主人」「論理的に読んでしまうは、秀れた作品とは思いつつも、敬遠ざけています。もっとも佐々木さんのドラマは、NHKとみたいと思っています。佐々木さんは再放送してくれないだろうけど。

（4／20・埼玉・谷川照好）

☆「ナイアガラ・トライアングル」を聴き、「ゴーゴー・ナイアガラ」を聞き、「日旺日」No5を読んで大瀧詠一氏にいたくシビレました。彼こそオピニオン・リーダー！というのは大ゲサすぎるけど、まあ、なんだかんだとMAOと一緒に大瀧詠一ばなしをしたいのだョ。ぜひに遊びに行こうと思っております。不死身のアルバイター・ヒーMAO氏とはいたしましては？

マな時間はないのかな？

石川セリのセカンド・アルバムもメタメタよいのです。朝やけが消えるミンの作った「ユーの詩は、異常にカッコヨ

▼えー、ぼくは「びんぼう」だから・・・ぼくはヒマなのです。けれどもヒマなんだ。「なびんぼう」なのだから・・・だ大滝詠一なのんのだョ。ジャンルは、ラーメンフアンなのだ。ニュ式非論理学論なのヨ。ナイアガラ式ねーなのだ。ねじ式だとわかるけれどもわかんないのよ。

前にの作った「朝やけが消えるイ」です。

石川セリのセカンド・アルバムもメタメタよいのです。朝やけが消えるミンの作った「ユーの詩は、異常にカッコヨ

先日は佐々木さんにお会いでき、順番が前後しちゃったけど、初めて親切にしていただいたのは感想を一言―大人の人にあれほど親切にしていただいたのは

（4／23・東京・野口　信）

☆あの「紅い花」を聴き、数回テープを聴いたね。「聴いた時、ヒタヒタと印象が残ったね。「ねじ式」は、ヒタヒタと印象が残ったね。「ねじ式」は、ヒタヒタと印象が残ったね。「ねじ式」は

PLAYBACK
〈第2回〉

「No.5」で予告した鉄屋彰子さんの「TV観たまま感じたまま」は都合により No.9へ発行予定。今回は、あんなこと、こんなこと、支離メチャクチャ特集です。

Triangle Concert TRIANGLE

★76.3.29
★芸ABCホール

☆すごい入り方で400人の会場は最初は銀坂に5次で50人くらいで…。バックコーラスにタ坂本サポートは…ユーカリ。ドラ銀次はボーカルとパーカッション。Kbdは坂本。ダ信じ?・・・ベ行ってプ。妹尾…銀次はボーカルと

☆ナイアガラ音頭すごい!

☆次は山下達郎。何と最初はガッチリ!ドンダンを2曲登場。バンドは形容しがたい彼女と、好みのポップ!ポップ。バーボンは銀次。美奈子サンガ!そのつ別れ"メブ。ンスたいスで

☆ハニーよ御ドくれ大ボ(??)イ!ルすっ。ちゃんサンガ!ーシュ大ルガ・ーリのと瀧ドわたちゃ本シュ。ーズーサノ詠にっョ。ンテブ:登e腕銀と"。ー。"ンー:登e場も組次"そのっ楽ズ"のe場も!Cんが遅そのっ白し"。"ウルガも!Cバ"でかすしメブ眉い。"ウCバ。ッ。つぎてンいス

☆ウェーブ!!ドすトに、ごいの相手びバと曲夜ガブのe場も組次"そのっ楽ズ"のe場も!Cんが遅そのっ白し"。"ウルガも!Cバ"でかすしメブ眉い。"ウCバ。ッ。つぎてンいス

ei

☆ぼくの仕事部屋にはアグネス・チャンと林寛子と岩崎宏美のポスターがはってある。アイデアが出ない時などアグネス助けて！」と叫ぶと不思議にかけるのでぼくはアホかもしれない。でもほんとはりこうかもしれない。でもしかしたらアグネス・チャンかもしれない。

☆できるなら女の子に生まれたかった。ヒラヒラのついた服を着て髪は内巻きにしたぐらいにして。お化粧に三時間くらいかけて。イイ男引っかけて。毎日ヒラヒラ生きていかれたらどんなに幸せだったろう。ああでもボクは男。男つらい。男苦しい。男イヤ。男マンがかく。

（吾妻ひでお著「ふたりと5人」および「おしゃべりラブ」まえがきより――）

ぼくは、松本零士と山上たつひこつげ義春と村野守美、そして吾妻ひでおのマンガを手に入る限り集めているのです。石森章太郎の弟子が永井のゴーちゃんで、ゴーちゃんの弟子にあたるのが吾妻ひでお、または吾妻ひで子さん（時々女になりたがる）なのだが、彼または彼女の二人の師の顔を立てたとしても、少なくともギャグマンがにおいては、彼または彼女こそもっともすぐれた才能の持主だといえよう。吾妻ひでおの最新刊「シッコモーロー博士」に付された編集部のコメント「著者のギャグは、人の心を弾ませる魅力をもっている。シャレたセンスで、ハ行の笑いを全編にあふれさせ、読みつづけていくうちに、いつのまにか自分が笑いの創作者になっていることに驚く」。

☆ミニージシャンばっかりで映画作ったら面白いだろうねえ。役者がそろってるよ。大滝くんとか細野くんとか集まってさ。誰かそんなの作ればいいのにね。ちゃんとシナリオ書いて、1年くらいかけて……

アメリカ村の前の家にいた頃はね、つきあいなんか面白いよ。近くに黒人が住んでたんだよね。そいつ、マージャンが好きなんだよ。それで、マージャンやるかって聞くからさ、できるよっていったら、そいつパイなんか持ってさ、遊びに来るんだよね。それがちゃんと、イーストとかウエストとか英語で書いてあってさ、まいっちゃったよ。それがさ、また強いの！

（「ビックリハウス」7月号より、小坂忠インタビュー）

ぼくは忠さんのサイン入りLP「ほうろう」を持っているのだ。とても好きなアルバムです。秋の新番組「気まぐれ天使」の主題歌を、なんと忠さんが唄っている。この石立鉄男主演のホームコメディ・シリーズも好きで、ずっとみている。大野雄二の音楽も好きで、大原麗子はもっと好きなのじゃ。

蟬がいた。
夏中、歌い暮らした。
秋がきた。
こまった、こまった……
（教訓）
それでよかった。

☆「ラ・フォンテーヌ寓話集」より

★11/15(土)バイト11〜22時
16〜19時まで休憩をもらって、大学祭・小川国夫講演を聴く。
テーマは「土地の意味するもの」
入場無料。
予定より少し遅れて小川氏が到着。主催者が小川氏の経歴を紹介、次いで演壇に立った小川氏は、もどかしそうな手つきでマイクをとり、それをもて余した様子。テーブルの水差しを引きよせ、水を飲むのかと思えば、水差しの口にマイクを押し込もうとしばし奮斗した末どうにか収まって、マイクスタンドが出来上がった。その間、みんなちょっとあっけにとられたように小川氏と水差しを見守っていた。
小川氏はまず、私は言語障害、というほどではありませんけど、うまく話せないので、がまんして聴いて下さい。と云って話しはじめた。

えーと、これは一年前の「ヨレヨレ日記」であります。未刊の大冊「臼旺日」No.6より転載。バカみたい。

編集中記

〈この手紙が届く頃にはここに居ないかもしれないではどこに居るかというと、それはまだ判らない。多分、東京の空の下でか屋根の下でか、若いぼくらは幸福者、それとも、貧しさに負けソー、なんてこと云ってるかもしれない。まいずれにしろ、先のことは判らない。

ちょうど2年前の秋、芸術祭ドラマとして放送された「夢の島少女」に出会った。それから一年半後つまり今年の春「紅い花」が放送され、上京して佐々木昭一郎さんと初めて会った。その直後だけ2ケの月の後、再び「NHKマザー」で佐々木さんに会い、更に「夢の島少女」を試写会させたのは多くの仲間が集まって、この10月22日にそして2年かたった。

1週間を経て、夢の島は「紅い花」とふしぎなめぐりあいをしてまた再放送されて追っかけて来た。現実的な旅の世界記憶の出来事には、どちらも言葉で表現せぬ感覚として残っている。

具体的に、佐々木作品を論評するよりも、みんなからの手紙とそれに対するぼくの応答の行間にそういった記憶の断片たりとも垣間みえればいいのだが：

次ページからは、YOTA宅にて印刷の予定：

(10/15 MAO記)

★よく雨が降るのでございます。4月を葬る5人連れ。昨夜（4/30）は山下洋輔トリオ。ふ夜に行き聴いた。／4/30／夢見が良かった。／夢の中で、あ故郷の山々は、遥か千年の昔、海の底だった。／海の中を泳ぐ魚たちは、遥か遠い昔、陸に居た

ではすっかり有名人ですね。それから6月の文芸坐の方はどうするんですか？NHKで佐々木さんの作品をみせて頂くのは、いつ頃になりそうですか？
（5／1に・兵庫・津田裕子）

▼5／19の朝、TBSラジオの林パックにDOC出演。ガラにもなく、しおらしくしていた。

★5月6日から新しい仕事が始まり、睡眠不足と疲労困憊の毎日です。今日は四日ぶりに家に帰り、ひと息ついているところです。試写会、会合など、はっきりした予定がわかりましたらすぐお知らせ下さい。当直でないと思いますが、その日を楽しみに。
（5／19・神奈川・今西由紀夫）

したら、あの人のミニコミなのですね。映画関係の人は熱心にすてきなミニコミを発行しているのですね。
大阪で沢チエのアルバムみつけました。また偶然にも東京の中古レコード店で、チエのデビュー・シングル「涙のビーチ・ラブ」をみつけてニコニコしています。
「紅い花」見ました。「古本屋」のパートがとても気に入りました。長々と感想を書く自信がないのですが、ごめんなさい。N・M・M（ニャ！ミニ・ジック・マガジン）にも評がのってましたヨ。
（5／20・大阪・加藤周也）

▼あの人っていうのは山内豊さんのことで、ガリ版の"MFS"と2本立で、活版の"ゴーラブ・オン"を始めた由。シネクラブでやったビートルズ映画の上映は、連日超満員だったそうで、まずはオメデトウ。
沢チエは「23ヤ」というアルバム一枚残して引退した女性シンガーで、キャラメル・ママ（現ティン・パン・アレイ）がバック

をつとめています。ぼくはアルバムは持っているけど、どういう人か全く知らなくて、加藤さんと会ったとき、彼女のこと、くわしく教えてもらったのです。

★四月三日のNHKテレビで放映された佐々木昭一郎演出の「紅い花」は、かなり興奮して見ました。ぼくの周辺ではぶんぶん話題になりました。
映画がわかるかどうかにいうこと映画の時間で視聴率はとれたかどうかは、テレビばなの放送番組にしてはね！
試写会佐々木昭一郎のTVドラマは思ってもらいたいと思ってはぜひ見せてもらいたいと思っています。最近見た映画で大傑作「リンドン」「激突！」「王様になろうとした男」「若者群」がおもしろかった。
（5／22・東京・山田宏一）

★6月6日は、ぼくは行けないのだ。それと当日「ぴあ」の主催で「殺し屋たちのメロディ」の上映会があって、関西から行く人間はそっちも予定にはいっているのだ。
水曰パックは林美雄が「暗く

なたておっらなるまで！そのをあまり気に入っ
ワてるとこたしくよいて。柄にもへなんもマズかって
ほろで待日おと。ってはい。ばどう。てな文た7ろ日で
っ〜ばどう。てはい。ばどう。てな文た7ろ日で
の〜ばしりどうてな芸方日で柄にもへなんもマズかって
（5非常かし久びち！地がに6で柄にもへなんもマズかって
／26に日さら！下よ会日すにな。なんもマズかって
・休日休に下をでいう場会。なんもマズかって
兵庫みはんにしてみて思所えロくアがズかって
・くやじゃうもて暗くうなどいとも。て
村いたうおウあはくうなどいとも。て
上のうおキとなのどいとも。て
知だ）しかい決とめす
彦）。いなやるだ。

★先日は大変お世話になりました。「帰ってからすぐに日記にしたためました。」と礼状がきました。この要旨は、ご結婚式の話、面白かったのに、何かけっこうめ思

詫びと手間がわずらわしいのだ。まっ切り近くの単純な人間は。「私は。最初の曲は。「マ夏の夏の木歌は人シ。Bで面白くなかなかテーマ。「マ恋人ビクだはシ。Bで面白くなかなかテーマ。「マ恋人ビクだはシ。Bで面白くなかなかテーマ。「マ恋人ビクだはシ

ど左様に、なにかとエイキョーされやすい人のようであります。で、彼にエイキョーを与えた脳外科の先生というのが、他でもない、山田宏一さんの生命を救った人なのだそうです。

★楽しみにしていたNHKでの試写会は間に合わないけど、7日に上京します。ドクター・ノオから聞いたと思う。土曜はいちおう本転なんで、すっぽかしができない。まぁ、涙をのんでありきらめます。

「ゴーゴーナイアガラ」オ50回の放送、偶然耳にしました。大滝さんの話術にまいりました。「ナイアガラ・トライアングル」買いました。

佐々木さんや「夢の島少女」に出会えないとなると、それが一種の強迫観念となって、夢で見るかもしれない。7日から11日ごろまで東京にいる予定なので、PHCの皆さんに運よく会えるかもしれないけれど、会えなければ、みんなによろしく。ぼくはドクター・ノオが本郷の下宿に泊めてくれるというのでそこに居坐り、おそらく呑み潰れることでせう。「限りなく透明に近いブルー」と「柔侠伝」3冊を読んでいる今日この頃。

(5/29、香川・山内豊)

▼ドクター・ノオ＝野口クンのことだそうな。

★「結婚前夜シリーズ」最終回は、新藤兼人脚本「愛は奪うもの」で、音楽・深町純で、なかなかいい出来でした。主体にした音が鮮烈で、よっと気にかかっていまして、ていねいにおくりたい。高原番組を一応書いておくと、主題歌「小倉一郎」が出てなど、演奏はなんのドラムの濃しいうっしゃいへいらっ、室等で、ス(満点)ライダーこち(山城新伍)と、ライダーこち(山城新伍)と、小倉一郎が出てなど、演奏はなんのドラムの濃しいうっしゃいへいらっ、室等で、ス(満点)

とを少し話した。NHKの佐々木昭一郎さんとこのことを少し聞いたりしました。今日受けとった「日曜日―」に案内のある

★「旦旦日」（試写会のおしらせ）、6/11にやっと受けとりました。今、出張で福島県にきています。5/9に広島を出たのだから、もう40日余。出張ではあまりヒマがなくて、映画もあまり見ることができないし、自分だけの時間もあまり持てません。でも、広島よりはずっと東京に近いってことに先日気が付きまして、夜、山田宏一さんにTEL.しました。「話の特集」でもこぼしてたように、F・トリュフォーの翻訳に苦労しているそうだし、マキノ雅弘さんに長時間にわたるインタビューをしたそうで、どう整理しようかなり長すぎて、あんまんなん悩んでいるとか。

「夢の島少女」も見たかったけど、今のボクには、ちょっとできそうにありません。

（6/18・福島・藤井知則）

▼出張前に広島で、YASとしょに「けんかえれじい」をみたおかげで、会津へ行くことにしたとか？おまけに藤井氏は岡山出身だそうで、よくできた話なのじゃ。ただ「ミチ子」さんがいないのが幸か不幸か…??

★えーっと、この前から、ひどくお久しぶりです。会社にあった「メンズクラブ」という雑誌めくってたら、山田宏一さんが「紅い花」に感動したと書いてったので、コピーして送る。おヌシ、もう知ってるかもしれんけど、気にせず受けとって下さい。なんでうちの会社に「メンズクラブ」なんかあるかちょうちょう。靴も、フッションの内なのだそうで、流行を追っているわけなのだよ。僕は流行におくれているから、靴は売れないから、専務は怒る。なんてことに、そっとる。まあ、久しぶりに、そういうものだ。

なんか、春が去り、雨が去り、夏になりそう。手紙出さないと誰からも手紙来なくて、ひとりぼっちで、ひとり想いばかりしている。

（6/23・広島・平田泰祥）

▼そういうもので、今号にコピーした山田さんの「紅い花」評は、靴屋株式会社のYAS提供ということになっとります。

★6月のさわやかな風の中、北海道にも花の季節がやってきました。みなさまにはお元気におすごしのことと存じます。

私たちは、6月6日、山中政治様御夫妻の御媒妁により、結婚いたしました。みなさまのあたたかい御祝福のもとに、新しい生活をはじめることができいます。身にあまる幸せを感じております。これからも、よろしく御指導くださいますようお願い申しあげます。

PS—池田君に刺激されました。これからもミニコミをよろしく。

（6/24・札幌・原田隆司・曜子）

▼月ジューン・ブライドっていう唄がありました。お幸せに。

★6/14からこちらにきていますが英語はダメ、車の運転もダメの「三重苦」生活です。バカ暑さで、110°Fといいますから、40°くらいあるのじゃないでしょうか。

（6/26・カリフォルニア・鉄屋彰子）

▼カリフォルニアの空は、やはり

青いですか？たまに雨が降ると学校は休みになる、という話をきいたけど、ホントかなー？

★森田童子の「グッド・バイ」は太宰でありませり。けどあのLP、太宰ー女々しいってとこ全然感じられなく、ぼくは、あの樹村みのり先生のひとコマひとコマを追うのと同じ気持で音をきいた。幼いところをちっともばかにできないのが、このLPだと思う。

ラジオの話し合い番組に週一回出てる。ま、そんなたいそれたことをしようという気はないし、アマチュアのしゃべり方だし、いろんなとこへ顔を出すのも一興。

（6／29・香川・山内　豊）

★「紅い花」「夢の島少女」「さすらい」「マザー」と見せてもらい、どれがどう、と言えないくらい。いまのところ、どうにも表現がみつからない。

リコピーPT501という複写機を買った。とにかく学校のXEROXは使用規定がうるさいし、街では高いし。減価償却を考えると、安い買物ではなかったかもしれない。できるだけ利用する。PHC・TVという形でなくとも、ミニコミは、やりたい。

（6／30・神奈川・池田博明）

▼というわけで、YOTAの購入した複写機を、ぼくも使わせてもらうのです。今号の普通紙（XEROXコピー）でないページがそれです。

★7／4NHK教育TVで、GYAさんが出てたね。「若い広場」だけど。アメリカ特集で、アメリカン・ニューシネマについてしゃべってた。その内容よりも、突如として、うちのTVに、GYAさんが出現したことに、ぼくは感動したのだった。

顔見知りの人がTVに写るというのは変な気持ちだねえ。

村上龍は芥川賞とったね。先日、朝早く電話で起こされ、その後TVをつけたら、NHKのスタジオなんとかに彼が出ていて、しゃべっておった。しゃべりながら自分で頷くところが若いなあと、そればかり思いながら見ていた。

（7／12・香川・山内　豊）

★「三四郎」「それから」漱石の作品を読み返している時、先日の佐々木昭一郎の映画を想い出した。「三四郎」の〝迷える小羊〟のまま、生＝現実に対して受け身であり、あるがままの現実をなし崩し的に受容してゆく態度を読んでいるうちに、佐々木氏の「夢の島少女」「さすらい」を想い浮べた訳だ。

哲学畑では「ニーチェ以後」というように言われる、絶対的普遍的神（価値）の死んだ今、個々人が個々人の重さでもって内面から湧き出でる生の様式（価値）を創らなければならない状況が、そしてその困難さが、「少女」にも「さすらい」にも良くでていた。

「自分は…自分である」と言い切ろうとする時に感ずる不快は、内面から統一自同律の不快は、自律・自主的人間像が一されたどんどん遠ざかってゆく現代の苦悩を表出している。「したたかさ」はどこへ行ってしまうのか…。少年の少女への対的やさしさ、無限の、ある意味では無償の、しかし、受動的なやさしさ。そして、夢の島にいる老婆の変わらぬ生活、そこにある、

した・たたかさが印象的だった。「さすらい」は「夢の…」よりも直接的であった。内発力が湧くものに賭けてゆく人々―旅芸人・フォーク歌手etc.と迷える小羊の少年。「さすらい」から「夢…少女」への道程は佐々木氏の進展でなく、深化がみられる。「さすらい」には、情熱のおもむくまま生きてゆく人間像に、未だ救いがある。一つのものに賭けてゆく青春がある。が、その「青春の酷薄さ」を見据えていない感がある。「夢の…」に救いがあるのだろうか。ラストシーンのごとく、砂の上をひたすら歩くだけなのだろうか。広大な少女の喪失感は少年の受身的な優しさでは埋めることができない。少女の拡散は、少年の狭く細い背中では背負いきれまい。

（ワ／27・浦和・大宮　登）

▼大宮君はYOTAの友人で、6月の試写会に来てくれました。

★先日は、NHKの方が長引いてしまったので、余り話もできませんで悪しからず。あの日は、本当、体の芯から疲れました。「夢の島少女」は思ったほどよくなかった。佐々木昭一郎さんの作風は、羽仁進に似ているような気がしました。ただ、どうもぼくがついていけないのは、シントシーンのつながりが作家の内部でちゃんと構造化されていないのではないか、ということ。吉本隆明の「映像過程論」でも読み返して、そのへんを きちんと押えてから、まとまった佐々木昭一郎ノートでも書こうと思っています。

「マザー」はとても好きです。「さすらい」は大キライなタイプの作品です。

（ワ／　・戸田・谷川照好）

▼こちらの連絡ミスなどで開映が遅れ、すみませんでした。谷川ご夫妻は、ぼくより先に来て待っててくれました。

★なんか、映画みるより、レコード聞いて、松本零士の「わが青春のアルカディア」なんかをよんでた方が、心安まるっうかウーム。

茜ゆう子は、僕は大嫌いで、タカノ橋日劇の山の井さんが大好きなんだよ。山の井さんは、ヘンな人で、伊猟奇犯罪もものはみんなみているというキリスト教徒なんだよ。あたしは口マン・ポルノの結城マミちゃんにつきるねー。お！そういえばドン・長谷部の「暴行切り裂きジャック」は、久々に、すごいバーバリズムでしたよー。長谷部アクションの華麗なる復活!!しかし、まあ、意外に、みんなつかれているけど、フラフラ気楽じゃないのかな。ムキになら ないだけ救われます。あ、たしゃ、ムキになるから、ダメかな！　あー泳ぎたーい!!海水パンツがないのだァ！

（ワ／23・広島・平田泰祥）

★このところ何回となく豊橋を通過しているのですが、いつかな途中下車の件会がありません。御無沙汰のしすぎですね。横浜ではSF映画をみて、高校野球のTVを見て、夜はビールを飲んで過すのだ。

（ワ／24・福井・佐々木　毅）

▼以下の方々から暑中または残暑おみまいのハガキをいただきました。まとめて紹介——

●徳木吉春君は、丸山圭子のLPを買い、「どうぞこのまま」が上半期ベストワン。

●川本三郎さんは、奥さんがヨーロッパ旅行中で、愛猫ニャロメコと健太クンと二人(?)暮し。

●内海陽子さんが、川本さんちへTELしたところ、お母さんがみえていて片づけをなさっていたみたいで、独身生活も大変らしい、とのこと。

●斉藤等君は、MGM映画がまたみられそうになったので、早くこいこい「二〇〇一年」と今から楽しみにしてます。

●村上知彦君は、三年ぶりに海で泳ぎ、あまりの汚なさにあきれ、アグネスのさよならコンサートを、我ながらアホかと思いながらも、うしろの方でしんみり聴き入ったそうだ。四国へ行って山内さんに会ったそうです。由美ちゃんもいっしょでした。

●池田博明君は、生物クラブの合宿で長野へ行った後、小百合さんと二人で、故郷の山形と北海道まで、長距離ドライブ。無事故で何より。しかし、タフですなア。その直前に、ぼくとMizukuが遊びに行った時は、小百合さんの方は、NHK合唱コンクール出場のため、準備に忙しそうだった。

●佐々木昭一郎さんは、インドへ取材旅行。二度目だそうな。連日45度をこす暑さ。

●秋本鉄次君は、サラリーマン生活ももう長くないかなァ！。中島ゆたか狂いも、もう長くないなァ、と、なると、更にけっこうなのだが……。

●津田裕子さんからも、おハガキいただきました。

★こっちは二人とも元気で、保谷の時代の延長です。高田保は朝起きて、おいしいコーヒーを入れようと、コーヒーのことばかり考えて、他には何も考えない。それをとても怠慢だと思うけど、どうしてもそんな時間をすごしてしまう、と日記か何かに書いていた。ボクは、いつもコーヒー、タイムだ。Mariは、NHK教育TV、中学生の英語の時間、いつもみているので、メキメキカをつけてきたようだ。

★山城に新居をかまえ、落ち着いたというところです。四日市市内とは申せ、白鷺が邸宅の真上を飛び、セミはジージー、ヤブ蚊はブンブン、もう別荘暮しとしか言い様のない所なのです。田羽さん室さん広瀬さんの3人組も、私の妹も遊びに来たし、後は、あなたがた2人を待つばかりなのです。

(8/17 四日市・柳川平和・真喜)

▼というわけで、池田家の次は四日市の柳川家を訪ねたのだ。同家では、コカコーラはのまない。NHKTVはみない。というテマエだそうだが、ナイショでみてるようです。Mariはビートルズ来日公演をみた4万人の内の1人で、当時の話など梨しくきかせてもらった。二人は16mmで自主上映やってるのだけど、客入りはサッパリ。そこで文部省だか文化庁だかを四日市

へ移転させ文化の興隆をはかろうという話で、ついでに大蔵省も移そうという計画もある。

★佐々木昭一郎さんから、先だって長い電話をいただき恐縮しました。お互いに"藤田君は東京に出てこない所がいいですね"で一致しました。山内豊君が上京した時は、久しぶりにまた、鉄ちゃん、内海さん、さかもりをしました。あの三人に会うとホッとします。映画を、まったく私的に、十分楽しんで見ていて、うらやましくなります。まわりの"状況"や"運動"との関係で言葉を発するようになったら、もうダメだ。というのが僕のがんこな考えです。だいち、日本映画界がどうなろうが、そんなことには まったく関心がないのです。

(9/13・三鷹・川本三郎)

▼11月から東京で暮すことになり、僕の唯一の取柄(?)も消えてしまいますが、今後ともよろしく…。

★2ケ月すぎてやっと慣れたかなァーというときに、日本に帰るようになってしまいました。TVはABCを中心にみてました。ゲームがすごく多くて、さすがアメリカというか、ドルがチラチラするものばかりです。ドラマは、リンゼー・ワグナーの「バイオニック・ウーマン」、リー・メージャスの「マンハッタン」、つまり「バイオニック・マン」が評判で載っている。

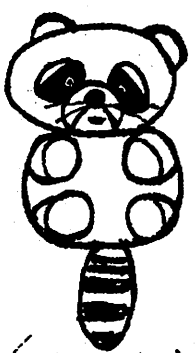
(9/22・ホノルル・鉄屋彰子)

▼カリフォルニアからの第一便より、わずか4ページ後の帰国便で、ぼくの方からは一度だけお便りを出しただけ。外国へ手紙出したのは生れて初めてじゃった。前ページでは、円羽さんが、シルクロッパへ、川本夫人がヨーロッパへ、広瀬さんがアメリカへ、佐々木さんがインドへ、各々旅行したそうで、みんなすごいねー。ぼくは、東京へ引っこすだけでも大仕事で、まだ荷造りもできてないのに、こんなミニコミ作ってて、ニブだよ。

★アーアー、東京へ行ける人はえェのおー、ワレ!!あたいも行きたいワ!しゃあないワイ!!僕は大阪でマキノさんの映画でも見ることにしますで。こまめに、そろそろ会社やめてもいいねまし。死のうと思っているのだけどいのいかんなんたいけどいのいや。うむしろに生きるのだけいねーいたいはりに生れてすのだいえ病院で、ぼくは、死にたいに入ってるねーあの白いベッドに気

(9/25・広島・平田泰祥)

Part Ⅲ へつづく…



↳YOTA宅にあるアライグマのぬいぐるみ。

★MONITOR ROOM★ 番外篇★

初めまして。

4月30日のドラマNHK"紅い花"の事につきまして。
私は、思うのですが、もう一度、放送しては、
どうでしょうか？

あのシリーズ中でも、一番良かったと思うのです。

流石、天下のNHK様。

お願いいたします。

あのドラマはすてきでした。

友達に伝えたところ、見たいというんだ、
ほとんどで、署名の通りです。

お願いします。NHKさま。

若者の味方、じーさんばーさんのみかた、

NHKさま、お願いです……。
紅い花をもう一度！キャ…ン。

©HRAN MAR GREETING CARDS LTD.

★この手紙とともに、札幌の女子高生（男の子も少々）
なんと75名様！もの署名がNHKへ届きました。
彼女たちには無断ですが、全員の氏名とコメントを
本誌に掲載しました。

2264

家族みんなで楽しめる

「テレビファン」5/2号より

異例づくめのなかで

NHK 世論で特別再放送決定

『紅い花』をもう一度!

↖これ、LUCY＝内海陽子さんのハガキ

〝珍しく〟といってはいい過ぎかも知れないが、NHKに対する視聴者側からの熱心な声がついに再放送を決めたドラマがある。話題のドラマは、四月二日に放送した土曜ドラマ・劇画シリーズ『紅い花』（つげ義春原作、佐々木昭一郎演出）。

「過去の記憶をたどる男と、男の記憶の中に存在するひとりの少女とのすがすがしい交感のドラマ」（佐々木氏への投書者である池田博明さん＝24歳・教員）であり、「つげ義春氏も佐々木昭一郎氏もよく知りませんが、この青々とした色彩と音があふれた作品を見ているだけで、その人となりがわかります。だれもがもっている〝やさしさ〟が現実の中へ溶けて流れてしまわざるを得ない毎日。せめてこういう押しつけがましくない、ひそやかな、やわらかい画面で失いつつあるものの影だけでも感じたい」（同・内海陽子さん）という声がいっぱいなのだ。七十人の署名を集めて再放送を希望してきた北海道の女子高生もいる。それらの声に応えてNHKは、放送日は未定ながら特別再放送を決定した。

「現在、土曜ドラマの再放送は野球中止の時に限っていますが、『紅い花』については、〝雨傘番組〟ではなく、土曜午後八時という第一回と同時間帯に再放送するつもりです。もちろん十月からは土曜ドラマの別なシリーズが始まりますので、十月までの時期と考えていただいて結構です」（制作・近藤晋チーフプロデューサー）

この同一時間での再放送というのも珍しいこと。内部での評価もかなり高い。番組のPRを担当した阪部幸夫氏は、

「ストーリーはないけど、通りすぎてきながら成長の過程で忘れ去ってしまった〝少年の日〟への思いが詩情豊かに描かれたメルヘンです。今度の機会にはぜひ、年配の方にも見ていただきたいですね」

といっている。

上の記事は「テレビファン」5/28からのコピイ。YOTAから送られてきたコピイで、ちょっと不鮮明なところもあるけど、土曜ドラマ「紅い花」の再放送を報じている。

この記事にあるように、「紅い花」放送後の反響は大きく、投書やデンワが相次いだようである。土曜ドラマ中、サイテイの視聴率にもかかわらず、だ。もともとごく限られた数の特定のモニターからはじき出される視聴率など、大してアテにならないけど。

この記事が出た後、再放送の決定はとり消されたとか聞いたが（くわしいことは知らない）半年たって芸術祭ドラマとして再放送されることになった。（その経緯も知らないが）とにかく、多くの人々の希望がかなった訳で、以下に、それらの投書特集。

★栗原弘　沒ねとう名　梨本実
斉藤克彦　望月勝利　永尾比呂志
かまのひくまの　判読不能：MAO）
小坂久大坂多　佐藤恵子　阿部信　島平岩清
高田紀　佐藤薫子　石原牧子　中西　仁　水幅
由子　後山し　前川　村上　泉　ひあ
石井勝　斉藤ば　阿部光　裕子小島　悦
裕子　多真志　佐藤み　佐川茂子　美穀
美　々由野美　石田牧　森睦子　田美　誠　伊藤　裕　佐川累　毅
の　話で　理　　　

含んだ音響だったこと。併せて生理的表現もピタリはまっていたこと、全体に昔の音が活き活きとしていた。一つ一つ昔テ朝日ニュース映画の明るい限行ードが、たの香りの使われ方に、コマとしての嬉しかった。横切って、ユニーク般飛躍的ドラマを恐るべき刃物音は無い世紀の中の仕組は変って今も昔も、妻ツバをつけて生活しない。

▼これも放送後、NHKへ届いたハガキ。小さな、どちらかというとたどたどしい文字で、ハガキ一面に書かれていた。文からみて、それにしても、昔々の朝日ニュース映画のテーマ…という曲は何だろうか？　参考までに「紅い花」で使われたレコードを記すと、ドノバン「リバーソンゲ」。

記上ラ「紅花」評は、短評し過ぎ。ご参考までに。

（4／7・品川区・岩渕）

「ザ・スター」モーツァルト
「キラキラ星変奏曲」ジョニ・デンバー「カントリーロード」
「プリズナーズ・ソング」シャンカール「川」その他

そして、池辺晋一郎のギター・ソロと、岩崎進の鈴・口笛・ギター。関係なくあるけど。フジTV「新座頭市」のテーマ曲（村井邦彦）のイントロが、何となくプリズナーズ・ソングのイントロに似てるようなでもって、座頭市みたいな気がする。紅い花が流れるたびに、ほんとうにあんが昨日みたいに行くシーンを思い出すのだけど、そういえば、ふしぎな夢の中にも、紅い花が咲いていたということである…。

★「紅い花」見ました。私にはわからない。なにもわからないんです。そしてあのドラマについて…私にはなんといったらいいのか。ただ私は言葉がみつかりません。ただめいというか、とにかく生けんめいとというか、一見てたんです。画面にぐんぐんとすいこまれていくような気さえしました。

私は画面を見ながら、なにも考えませんでした。この話がなにを言おうとしているかなんて考えもしませんでした。と言うよりなにも考えられなかったのかもしれません。話が終って、川がうつってて　ギターの音とうたがきこえてきて…そしてうたがじわーっと涙がこみあげてきて…

どうして涙なんかがたからんだろう。先に書きまして言葉がしかったのかな。きでみてきだ漢然たのかなわ悲しみ？かでもし悲うな気持ちにないようなら切ないが悲みてやそう思うよりもしまって。たしあげてきた。私に言えることはみたいこれだけです。へつげ義春へ4／3・9:50Pm・しょうゆ

マを見終ってから思ったことですが、このドラマの中にはやさしさがいっぱいなんです。少女のやさしさがあってそしてマサジのやさしさがいっぱいもんだから。

い涙なんかが　こみあげてきて
本当にやさしいもんだから　かえって悲しいような切ないような気になってしまったんじゃないかなってね。うちおとしたカモをこうしてしまう少女のやさしさ――やさしいって悲しいことなのかもしれない。
（吹田市・庄司由紀子）

▼これは、大阪の「プレイガイド・ジャーナル」に寄せられたハガキ。なんと、放送の本当に直後に書いてくれたんですね。ぼくも、このハガキを書き写しながら、「夢の島少女」をみたときのことを思い出して、涙腺がゆるんでしまった。ぼくが、「夢の島」を見終ったときの気持ちが、彼女と、全く同じものだった。自分でも訳のわからないまま、とつぜん、涙がこみあげてきたのだった。みている間は、ただ一生けんめい、みていた。何も考えなかったし、考えられなかった。そして見終った瞬間、涙が出てきた。今まで味わったことのない感動におどろき、頭の中でこれに似たものを探したら「紅い花」が、たまたま浮んできただけのことであり、このニつをことさらのように比べてみるのは、佐々木さんにとっては迷惑な話だろう。それは、つげ版「紅い花」と、佐々木版「紅い花」についても云えることかもしれない。

ぼくは、そして多くのつげファンも同様と思うが、TV「紅い花」をみながら、原作の一コマ一コマを思い浮べては、考えなくともよいことを考え、失望といっては云いすぎだが、異和感にとらわれ続けたのではなかったか。それが、正しいとか、まちがっているというのではないが。ただ、この投書の彼女のように無心にみることが出来なかったことを悔やむばかりである。

★こんにちわ。私は18才の女の子です。昨日「紅い花」を見ました。何か遠くの世界のしかし心の中のすぐ近くにあるような神秘的な夢をみつけました。それは決して楽しい夢ではなく、はかなくメランコリーな夢ですけど。サヨコはいつもひとりぼっちで寂しい瞳をして、不安定な風の様で、つかみどころがないです。そうゆうふんいきを漂わせながらも　とても純真さを感じます。そして最後に森に帰らせてあげた場面には安らぎを感じました。とにかく印象深い作品でした。
（4/4・京都市・小田敬子）

▼これも「プガジャ」への投書です。どちらもGYAさんから回送してもらったもの。それにしても、若い女のコたちに圧倒的大好評で、ワガ国の未来は意外に明るいようであります。

ちゃいむ

一般品の「紅い花」NHK劇団シリーズの「こい花」を見た。つげ義春の漫画はわかりにくいがこのドラマもわかりにくかった。原作品は「紅い花」「沼」「古本と少女」の三つであると思うが、セリフを明らかにさらに「ゲンセンカン主人」「ねじ式」からの来もあり

そうだ。しかしこのドラマは原作では見たと得られなかったこと病がかなりうまく描き演じられていたと思う。つげ義春の漫画を読まなければ理解出来ない部分もあったと思うが、劇画シリーズの前作と比べればドラマの質は一段であった。
（笹塚県加茂郡川辺町・山田親人（こん学生）

▼これは「スポーツ・ニッポン」4/10付に掲載された投書で、GYAさん提供。次のも同じく「スポニチ」4/7付より。

"ロボ"の再放送を！
ボクたちは、ラッキー・ロボ"の大ファンでした。だが三月で終わってしまった。とても

完全中継をやってくれた。まさにNHK様々という感じだった。営業面の関係で民放ではできにくいことだろうが、その中にあってセンターにカメラをすえた毎日テレビの努力は賞えるる。＝豊中市本町・田島康一（主婦・会社員）

心に残るドラマ

四月三日放送のNHK「紅い花」は七十分間の不思議な体験だった。つげ義春の劇画を原作に持つこのドラマは、これといった筋があるわけでもなく、断片的なエピソードのつみ重ねで主人公「私」の妹にまつわる思い出を夢のように描いてゆく。見っ放しですぐに消えてしまうようなドラマの多い中、おぼろげながら、いつか見た夢のように、いつまでも心に残る、こんな作品がもっとあって良いと感わせた。＝西宮市高松町・梶木俊夏（主婦・会社員）

◇放送に関する投稿歓迎◇
◇ハガキでお願いします◇
住所、氏名、職業、年齢を明記◇採用分には記念品を贈ります。

★御願いごと…

昭和49年10月15日（火）に放送されたドラマ（作・演出・佐々木昭一郎）芸術祭参加作品「夢の島少女」もう一度見たく、いつか再放送をして下さると思い、今まで、ひたすら待ち続けていましたが、一向に、その様子が見えないので、まさか、このはがき一枚で（いくらテレビ料金払っているとしても！）私の思い通りになるとは思ってはいませんが、なんとも落ちつかず、せめて毎日、新聞のTV板を穴のあくほど見ている、哀れな「ゆめのしま少女」の存在を知っていただくだけでも安心すると思い、Pig貯金箱から10円出して、このはがきを買いに行ったのでした。

もし、もしも、万一、いえ、そんな虫のいいことは考えていませんが、もしも…再放送されたぬきには、私はNHKのビルの掃除婦として一生を捧げます。これは、堅い決心です。

なにとぞ、なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

（東京都夢の島　川治い安アパート内・夢野島子）

▼なにしろ、ハガキ10円の時代であるから、かなり古い投書なのだが、消印は、50年3月17日神奈川県藤沢局、となっている。ともかく、夢野島子とは、よくぞ付けたり、ただただカンゲキ。NHK投書史上、比類なきものであろう。

編集中記

引っこしまで、あと3日。6年半もの間住んでいたけど、ぼくは豊橋の街を、ほとんど、知らずじまいだった。いつまでたっても、異郷という感じがしていた。旅行者だとすれば、ずいぶん怠けていたことになる。よけいな荷物もふえてしまって目下、荷造りに苦戦中。いちばん最後につめこむのは、TVセットである。

昨夜「紅い花」再放送をみた。どうでもいいような特別番組のため、予定より45分遅れて放送がはじまった。荷造りの手を休め、段ボール箱や、処分するガラク夕、古雑誌の山に囲まれた雑然とした空気の中でみたのだ。

結果をいえば、4月にみたときより、ずっとよかった。ほとんど、よけいなことを意訳することもなく、ただ淡々と、画と音の流れに身をまかせることができた。とりわけ、音の世界はすばらしかった。プロローグ、出版社のシーンで、バックから凡の音とも爆音ともとれる雑踏の音が湧きあがってきた瞬間、まぎれもない佐々木昭一郎の世界が現われた。そして、エピローグ、汽車が近づいてくるようなゴッシゴッシとペンの走る音で、元の場所へ戻るのだった。

MONITOR ROOM Part Ⅲ

★10月9日(土)午後かタ刻の新幹線で、まず大阪へ。そこでGYA氏に一度会い、10日午後か11日午前にMAO氏のところへ行くというのですが、いかがでしょう？なにぶん先のことはどうなるやらわかりませんが、必ず電話連絡します。大阪に着き次第、秘密の目印ですが、それからはメガネにブルーの帽子こちらは「カツコーの巣の上で」の中へJ・ニコルスンがかぶってい

たようなハテ。

MAO氏は人民服に人民帽ですか。

PS・例のNHK・TV「紅花」いよいよ再放送されるそうですね。

(9/29・東京・佐々木 肇)

▼以前、互いのミニコミをやりとりしてた佐々木君と、数年ぶりに交信復活。そして10月に初対面したのだけれど、この数年間のブランクなど全くなかったかのように、お互い似たようなことばかりやっていたことを確認し合って、大いに安心した。彼も「さすがに夢の島少女」をみていたそうだ。最初の電話をもらったとき「佐々木です」と名乗られて、てっきりNHKの佐々木さんとばかり思い込んでしまい、しばらくトンチンカンなやりとり。声や話しぶりが似てました。住所も世田谷で、佐々木昭一郎さんの近く。

★この前お便りしてからもう3ケ月になりますが、やっとこの14日にこちらにやってきました。進路は以前と大部異なるので皆とは遠くなる一方だけど、関心は持ち続けていくつもりです。「日旺日にはTVを消せ」こちらの方にお送り載ければ幸いです。

(10/1・大阪・清水成一)

▼コーン・フィールドで初めて会った清水さん、6月NHK試写へ来てくれたときには、もう放送批評をやめてました。川本さんの予言は外れたのか、半ば的中したというべきか…。

★まるっきり同じ授業も詰らぬので、毎日予習、定時制も全日制と別のやり方でやっているので、これも準備で他に生徒会活動と雑務で過労気味。本をよんでも考える余裕をもてず、どこへ入ったかわからん。小百合は校内合唱コンクールの準備で、かけ回っている。一週間くらいねてくらしたい…

(10/6・神奈川・池田博明)

★近頃というかだいぶ古くなるけど「アグネスのさよならコンサート」には感動いたしました。おかげで、その後やった再放送もみたのだ。「映画館」このところ又少し座っているのがこに慣れてきたので、寝ながら本を読む時間が多くなりつつあります。「鉄腕アトム」21巻全部をいま読了したばかり。

(10/9・埼玉・谷川照好)

★「スカイ・グレー」聞きつつ"スカイ・ブルー"なんて叫んでいるのよね。そうするとみんなこいつ、アホとちゃうか"なんてメツキすんのよね。そうするとアタイもムキになって"なんでえ、バーロー!!"てな気分に、ツイツイ、なっちまっ

てね。毎日毎日、スカイウームで年の色売れ残ってい靴ングえやっぱり、なんでグレ尻色。
会社が界のバカ流行色で、のグレファッションに靴
たいなそ来ばでみまあパ二靴クレ女シ
クでも会社のよのねワルカ俺はなのよ
ラテスかのプ中ではソルカナ
んて歌わないのトンかァーソ
白鳥の歌は聞えないよね。なんせ、なソ?!
TVアニメ「ガンバの大冒険」
も大和屋さんが脚本を書いてい
るよ。こちらでは「トムとジェリー」やっていて、いやー、テ
ッリー・シリーズは、ムチャクチャ
クス・アヴェリーのドルーピ
に、ホラ話ユーモアで、コーフン
気味なのよね。こういうのを、
カセットにとって、くり返しく
り返し、見たい気がする。よみm
買う金は、てんでなくて、いや
になるのよね。
(10ノ12・広島・平田泰祥)

▼こないだ、大和屋竺が脚本を書いたTVアニメ「元祖・天才バカボン」なんてのをみたのよね。「これが料理人」ハリーのクレッシングを注意で、そのもみたいなんてにしてみるとけどバカボンモロシをインの残念なのよ。お目に大和屋さんとなくて、かなかなかれなくていいだから歩てエサ代遊ぶ。エドルパリ大オモロイのよね。人なのも、せ「かルなんよ。
和屋さんに以外のチーピーラピーオーツを飼では東京ムーニビーニ匹のオモロイ世「わが家ではチャ屋さんだよ。MGMのオンのマークをおたしかめの上、お求め下さいなのよ。

★わが家では、ネコが2匹にふえました。ゴロニャンのガールフレンドで、シャムのメス、まだ名前がありません。オイとかコラとかホレとかですませています。一日じゅう、暴れまわっていて、こっちがネコの生活のリズムにあわせないといけません。
「キネ旬」は、やめてよかったなと、いまさらながらホッと

★まんがはTVは「ガロ」をよむだけだし、TVは、見ることが数少ない毎日。毎日の新聞のTV欄は気をつけて、NHKTVドラマの芸術祭参加作品だけは、見逃さないようにしているのじゃ。

「恐怖はゆるやかに」長谷川和彦がシナリオ書いとりましたな。どこで皮肉というか悪意が現われよるかと思っていたら、案の定、出てきよりましたわい。自殺し君が代ー暗黒こう書いてしまうと、みもふたもないのんですが、まさにこれだけしかないドラマです。加藤嘉の書かざるをえませんお爺ちゃんが一番突出しとりました。

しいていいます。酒井さんのようなものは、人がいどういうのは道化サロンいいしるのうるのいしるが道化サロンいいしるのうるのいしるが道化サロンいいしるのうるのいしるが

○「タウン」
ドラマとドキュメンタリーの融合。こちらの気持ちを波打たせるものは、作り手がなかなかもとめられないことの不可能をもとめざして作ってきたこれは、あまり理解することのだから、重ねて平板な日常と映像を積みしかし、リンゴ・スターの思うのだ。
しかし、リンゴ・スターの思うのだ。
よく似た青年に密着して追うよりも、A↓B、B↓C、C↓Dとカメラをパンすると、ちょうどA↓B、B↓C、C↓Dと人物を追っていくように次々と登場人物を追っていくように次々と登場人物を追っていくように次々と登場

PLAY BACK MEMO

どうでもいいことだが、ものついでに書きとめておく。

初めて「ガロ」を南いて読んだのは、つげ義春「紅い花」だった。

四日市のB書店で立ち読みした。

この載った号は、67年10月号。

2度目に「ガロ」を読んでいて、はっきり覚えていないのは、69年7月号。林静一の「まっかな絵」だった。

これは、強く印象に残った。

「ガロ」と佐々木マキの「四日市の全」だった。

C書房で立ち読みした。

当時の女性週刊誌に、「フレーズ入り"学生も読んでいる!"」紹介されたりした。

連載キャッチ・マンが、少しずつ学生の間で人気になったのだ。

林静一の「まっかな絵」は、初めて彼のマンガに接したあとの、これがそうか、と思った。

その頃は、最初のつげ作品集が世に出て、これも学校帰りにH書房で立ち読みした。

作品集の2度目の出会いだった。

「山椒魚」「季さん一家」「ほんやら洞のべんさん」を、とても気に入ったようだった。

その頃、ぼくは、新刊の本やマンガはもっぱら立ち読みし、せいぜい「買えるものといえば、一冊70円前後だった。

「ガロ」の古本へは、地方の古本屋でも定価以上になっていることぐらいだったから、休みの日には、自転車で古本屋へ通って「ガロ」を2、3冊ずつあさって来たりした。

つげの「ねじ式」が、男性週刊誌に転載されたのも、その頃だったろう。

「ねじ式映画」なんてのを作った人もいる。佐々木マキは、大朝日ジャーナルに描くようになった。

つげ義春が、佐々木昭一郎に語っている(?)

「放送批評」76年3月号)

TV出演とは、69年の9月頃のことで、多分、TBSの「ヤングワ2O」という朝の番組だと思う。

佐々木マキ、林静一、つげ仲子、他に、佐々木マキ「ガロ」の各マスコミが家たちが出ていた。

あげはじめ、さまざまなマンガ全集の出版とあいまって、大マンガ・ブームとなった。

とはいえ、「ガロ」そのものも、作家たちも、さして暮らし向きがよくなった様子はなかった。

値上がりしたキャベツを買えなかったつげ義春のために、賞金の多いマンガが賞を与えるべきだ、と、なるべくいう涙ぐましい投書をそこに寄せた人もいる。

「ガロ」の投書の主は、永木しげるセンセであった。

NHKのドキュメンタリーで、佐々木マキのアトリエ兼居間兼ダイニングキッチンを拝見したこともあった。

大四畳半のかたすみに、キャベツとオイモがころがっていたのを、鮮烈に記憶している。

話はとんで、今度、ぼくとMizukuが住むことになったMi区は、何かと引っ越しが縁のある土地。

ここのバザーに来た日にはところ。

虫プロ労組主催の虫プロのカリスマ。

錦湯にはパンフレッ屋さんに、少ちばしてつダーの虫プロのセンセ。

西に石はやはり、と。

吾妻治虫おの色紙。

東に石ぶ手塚ひ住で練馬変態クそして、何たっ即おん馬でいる。

マラブの本拠地でもあるのじゃ!

マンガ少年が長じてマンガの街に住もうとは…いやはやなのよ。

学芸

映像時評

岡本博

TV映画「紅い花」と洋画「カッコーの巣の上で」

同じ性質で結びつく

そう快さを失わず

佐々木昭一郎のTV映画「紅い花」（NHK4・3）で私はまた、一見矛盾する奇妙な経験をした。最初、試写室で見た時の印象では、一口でいえば面白いナという程度であった。それが翌日以後、何度もそう快な映像としてよみがえる思いをもつことに、久しぶりで驚かないわけにいかなかった。よい映像のこの回復性は独特であって、そんなそう快な効用をいつまでも失わない映画やTVの作品、報道を他にもいくつか私はもっている。

早い話が佐々木の「マザー」や「さすらい」もそんなTV映画である。それよりはるか昔の中学一、二年のころに見たモームの「雨」（監督ルイス・マイルストン）でさえ、終わりの方の一カットなど、いまでもありありと覚えている。監督などより俳優（ジョーン・クロフォードの売春婦など）という年代のことだ。惜しむ神父に裏切られて、主人公がまた初めの落々しい化粧に戻る。それを雨あがりの水たまりに水滴の落ちるさま――ゆっくりパンアップしていくと派手なくつ下の脚――短いひっちりスカート――それからタバコをくわえた厚化粧の顔にたどりつくまでのカットだけは忘れていない。のんきな中学生

「紅い花」のーシーン

を、とにかく一週間ニヒリストにしたショックであったことも覚えている。

回復性の強い原因

つげ義春の原作漫画「紅い花」はか何編かを自由につないだのがTV「紅い花」である。つげ漫画の陰うつな世界と佐々木の知的な明るさの合奏でもある。原作にはない"爽香（ふんしょ）"をうまく持ち込んだのは、ひとつの暗い時代の重味が全体にかけられる工夫としてきいている。多くの映画の名ラストシーンのように、回復性の強さの一因はその後半の一節にもあるのだが、むろん全体にひろがるドキュメンタリーな視点が第一だろう。

そう快感の第二の事情は、私の少々偏見くさい推測になる。製作の間隔からいっても、作者の実力からいっても、佐々木は「マザー」の後や「さすらい」の後で、いつも"立たされた"ようにみえる。そのうえで三度、自己中心の作り方を変えることなしに「紅い花」を発表できたということ。一人の作家がNHKの巨大機構の中に埋没もしくは蒸発しなかったというのもしさがそこにある。そういう「紅い花」の気持よさは、佐々木にとってもNHKにとっても、作品の映像性とそのまま混同してしまえないところでも成りたつはずなのである。

「紅い花」が「マザー」や「さすらい」にくらべて強じんさがあると考えたのは、放送の時もう一度自宅で見て、照明や雑音の調整される試写室より、よほどわい雑な条件のもとで「紅い花」はかえって強い抵抗感が減っていたと感じたからである。この試写は映画の試写室と劇場のちがいに似ていて、大衆芸能の条件にふさわしい。主人公の漫画家の声の耳ざわりな野太さなどが、下町の騒音の中で拡散され、ずっと聞きよくなっているのである。これもこのTV映画の回復性につながるものだろう。騒音の中の強さとは、この場合、ドキュメンタリーな映像の特質でもあり、ドキュメンタリーの作法のうちにあるわい雑さこのものの抵抗力であるはずだ。

印象的なラスト

ミロス・フォアマンの「カッコーの巣の上で」は、まさにこのわい雑もしくはワイセツな感覚のうえに組み立てられて成功した一例である。主役のジャック・ニコルソンの個性にそれは端的にあらわれる。ある州立精神病院に刑務所から回送されて来た男の話だ。刑務所の労働をきらってニセ患者になりすましているが、じきに正体がばれる。「正常だけれど危険な人間、精神病ではないが異常」だと診断される。彼が患者たちを煽気にし、病院の規則を破り、乱痴を働いて"植物人間"にされてしまい、それを哀れに思ったもう一人のニセ患者のインディアンに"楽にされ"るという筋である。しかし、その行動と死が、患者たちの間にふしぎな変化をもたらすというところに作の主題があるのだろう。いわば明るい積極性のようなものだ。インディアンが怪力で脱走、夜明けの彼方に消えるという印象的なラストに、客席がこれ拍手がおこっている。

むろんオッチョコチョイの素朴でしかない主人公に、その意図があって生み出された変化ではない。彼はただ物理的な力で得られるのが、がまんできないというだけの平凡な男にすぎない。病院と秩序の側からいえば、それだけでも"危険で異常"なのであり、ニコルソンの持味でいえばまことにワイセツなのである。そんな男が自身の命と引換えに、楽で去勢された患者たちを生気づかせるということ。そこにワイセツの効用の二重性がほぼ正確に働いている。

作者がおこっている。

むろんオッチョコチョイの素朴でしかない主人公に、その意図があって生み出された変化ではない。彼はただ物理的な力で得られるのが、がまんできないというだけの平凡な男にすぎない。病院と秩序の側からいえば、それだけでも"危険で異常"なのであり、ニコルソンの持味でいえばまことにワイセツなのである。そんな男が自身の命と引換えに、楽で去勢された患者たちを生気づかせるということ。そこにワイセツの効用の二重性がほぼ正確に働いている

は倫理以上の連帯的感覚を伴ずにすませられないところは、ということを見てとって、演出である。そういう特別院のありようを心得た医師や看は、独特で、はんぱで、さまざまに忍耐づよいという意味だけでも、まさにわい雑としかいいがないものだし、これをドキュメンタリーにとらえて描写する作家自身もワイセツな感覚は、作家と対象のこの接触を二重視点ぬきではかなわないはずだ。ソンは、俳優としての生涯において、ほぼ倫理に演技したという

のがみえるのである。この映画場合も、私には自分が同じような場所で二年半ほど暮らしたという三年ばかり前の経験と、どうしても重ならずにはいないし、その中で、いかにもたしかな演出に心しないでいられないという特なケースになる。

従って、演出技術の問題よりに、作家のドキュメンタリーなのようなを一つ一つ、患者や看護やその関係のこまかい動きに思いがある。精神病院くらい、の治療と保護に医学以外、も

映画へ

山田宏一

過去の映像体験がぼくを揺ぶる……

果てしなくつづく放水路をカメラが水面すれすれにすべっゆく。疾走という表現をつかいたいくらいのスピーディな走であり、めくるめくような速い前進移動だ。もしかした、カメラの移動は、段階的に、みるみる、そのスピードをめていったのかもしれない。いずれにせよ、このめくるめようなスピーディなカメラの滑走が、佐々木昭一郎演出のレビ・ドラマ『紅い花』（3月3日NHKテレビ放映）の頭の衝撃的な映像であった。この衝撃は2カ月たったいまなお、ぼくの脳裏に強烈な残像となってうごめいている。レビの映像は、見たあとすぐ忘れ去られるもの、捨て去らるものだとよく言われるけれども（そして実際そのとおりのだけれども）、『紅い花』は、そんなはかないテレビの像の宿命を超えた、まことに稀有なテレビ体験をぼくに強するものであった。

水面を滑走してゆくカメラは、やがて、いつのまにか――像がオーヴァラップして――線路のうえを走ってゆく。いのまにか、ぼくはこの快速カメラに乗って（いや、まさにのリズムに乗せられて）、なにやら不思議の国にやってきしまったようだ。

カメラはしだいに徐行し、とある場末の終点に到着する。んだか、いつも空っ風ばかり吹きとおっているような、わしい街の風景。しがないマンガ家の青年が出てきて、ひとの少女の顔の絵を描くと、その絵にダブってヒロインのキチサチコが登場し、またいつのまにか、森の風景のなかにくらは吸いこまれているのだが、この、まさに、吸いこまるという感覚が、じつに奇妙なテレビ体験だった。テレビ画像に吸いこまれるなんてことは、めったにないし、あっはならないような気さえするのだ。映画館の暗闇のなかで、ぼくらはしばしば、観客席全体を、映画館の空間そのもを、消し去って、スクリーンのなかに吸いこまれてしまう合がある。しかし、テレビの画面には、それをとりかこむ闇もない……。テレビ受像機は日常生活のなかのひとつの度品にしかすきないとさえ言ったひとがいるが、それほどで極論しないまでも、暗闇という空間をもたないテレビの画像が、いつのまにかそのイメージの世界にぼくを完全に吸いこんでしまったのだ。これは、あきらかに、テレビはなれした映像であり、その意味では、異端の映像だった。佐々木昭一郎演出の『紅い花』の幸福、そして同時にまた不幸（なぜなら視聴率はかなり低かったということだから）も、そこにあるにちがいない。

ぼくは『紅い花』の幸福をたっぷりと味わった視聴者のひとりだ。

は、つげ義春のマンガ（むしろ劇画とかコミックとか言うべきなのかもしれないが）の少女とはちょっとイメージがちがうような気もしたけれども、マサジの軍帽が流れている小川のせせらぎや、森の緑や、そして もちろん、紅い花の色彩が、鮮烈な思い出に残ったからだ。ぼくにとって、映像の衝撃は、日々の糧だ。

マイケル・ケイン

『紅い花』は、また、ぼくがまだ映画というものを知らなかった時代の映像体験――それは紙芝居だった――の記憶を甦らせた。

海と山にはさまれた東北の小さな村。何々村字何々といっような住所で表示される寒村だ。山のほうから、あの小学校の小使いさんが鳴らすような鐘の音が聞こえてくると、ぼくは一目散に駆けて、山の道を昇って行った。山むこうからやってくる紙芝居屋さんをつかまえ、小使いさんの鐘をうけとり、ひと足先に村じゅうを走りまわって鐘を鳴らし、紙芝居屋さんがやってきたことを告げるのだった。そして、この宣伝協力の代償として、紙芝居をただで見せてもらったのだ。

紙芝居には、もちろん、それをとりかこむ暗闇などありはしなかった。にもかかわらず、いま思うと――これはのちの映画体験によって脚色された記憶の錯綜なのかもしれないのだが――紙芝居屋さんがやってくるのはいつも夕方で、紙芝居が終わったときには、すでにとっぷりと日が暮れて、薄暗い空間がぼくらをとりかこんでいたような気がするのである。

日々、新しい映像に出会うごとに、ぼくの場合は、記憶のなかの映像が甦ってきて、その記憶のなかの映像と新しい映像との幸福な、もしくは不幸な衝突によって、ぼく自身の映画体験をふくらませてゆくような気がする。たとえば、つい2、3日まえ、ぼくはジョン・ヒューストン監督の『王になろうとした男』を見て、マイケル・ケインという役者がはじめてすばらしいと思い、久しぶりにジョン・ヒューストンならではの規模のでかい、崇高な〈冒険〉の心意気に感動した。しかし、ただひとつ、これがキプリング原作の冒険小説の映画化だという点だけが、どうしても納得がゆかない――しかもその理由たるや、単純そのものなのだ。キプリングと言えば、『ジャングル・ブック』。1942年に映画化されているが、日本公開は1951年。ぼくは中学生のときにこの映画を見たが、そのときの色彩の記憶がまだ強烈に残っていて、その記憶のなかのキプリングのドラマの世界の色彩と、こんど見た新しいキプリングの映画世界の色彩とが、あまりに異っているので、衝撃がチグハグになってしまって、どうも完全に幸福な体験として消化しきれずに困っているのである。『ジャングル・ブック』はアレクサンダー・コルダがハリウッドで製作した映画だから、たぶん、ナタリー・カルマスの色彩設計によるテクニカラー作品だったのではないかと思う。緑と赤が鮮烈なカラーだったが、『王になろうとした男』には、その緑と赤がない。ただ、それだけのことなのだが……どうも心が安まらないのである。

◀週刊TVガイド

キクチサヨコを考えてみませんか？

紅い花（昭和51年度芸術祭参加作品）

10／22㊎NHK総合 20:10・15

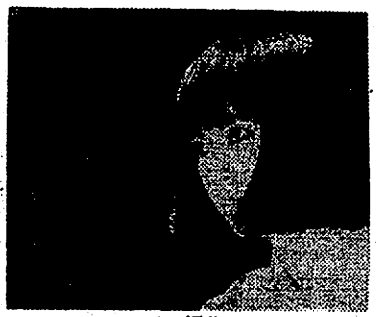
〈前口上〉劇画家、つげ義春の短編「紅い花」「沼」などをドラマ化。演出は「さすらい」「夢の島少女」などの作品で知られる佐々木昭一郎。そこで、芸祭参加にちなんで佐々木さんからのメッセージ。

Special Guide

◇

これは、記憶を描いたドラマだ。なつかしさ〈ノスタルジー〉と同時に、その正反対にある自己の中の痛みを、劇中の移動ショットに託した。川は、人間が見られない何かを反映させていて、劇中の悲劇的時代から現代まで流れているのだ。

私が少年の頃、川の上を、多くの飛行機が飛んでいた。そして多くの人が殺された。それは私にとって一つの「不条理」ことなのだ。「紅い花」に登場するキクチサヨコは、少年時代の私の置きかえである。今、この東京に、〝キクチサヨコ〟を、見ようと思えば、たくさんいる。太陽がパッと映し出さない都会の片隅に、ポツンと咲いている雑花のような。一つの太陽しか映し出さないそういう花に、私は光を当てたのだ。



ヒロイン沢井桃子

■メモ　原作の「紅い花」は一九六七年十月、劇画誌「ガロ」に発表。最近、小学館漫画文庫に収められ、九万部を突破する。近作「夜が掴む」も評判を呼んでいる。

〈後口上〉芸祭のための芸祭ものではない作品。本来、芸祭は後からやってくるもの、追いかけるものではないという例であります。

メンズクラブ・76年7月号▶

毎日新聞・4月6日(夕)

深められた〈生の原型〉——

佐々木昭一郎が久々のドラマ

「マザー」（一九七〇年度モンテカルロ国際テレビ祭最高賞）、「さすらい」（昭和四十六年度芸術祭大賞）、そして一昨年の「夢の島少女」と、寡作ながらすぐれた作品を問うてきたNHKの演出家、佐々木昭一郎が、久々にドラマをつくった。去る三日放送された「紅い花」（つげ義春原作）だが、同ディレクターの一貫したモチーフである自身のA生の原型の構築が一段と深められ、鮮やかなイメージとして表出されている。ドラマの大勢が娯楽色へ傾斜しているなかで、このような滅亡な芸術作品が存在するということは、一つの〝救い〟である。

ふりずむ

作品から考えるかぎり、佐々木が固執するA生の原型〈は、少年時の性開体験にあるといっていい。性への目覚めが、その〈生〉を動かすようなそのとき、〈紅い花〉で鮮やかなイメージ

彼はいわば、自分の生が切断されるといった体験をもったのだ。彼の作品に必ず登場する花や炎の赤いイメージは、この切断の痛みの形象化であり、少女は失われた自分を象徴する。そして何にも増して力説されねばならないのは、これらの形象が佐々木個人を超えて、世代としてのA性開示〈にまで普遍化されていることである。

娯楽作品をけなすのでは、むろんない。娯楽と同様に、良質の芸術作品もまた、視聴者は望んでいるということだ。豊橋市のファンなどが、ガリ版刷りのテレビ批評誌を発行して「佐々木の世界を知ろう！」と呼びかけているほどなのである。

▶提供★野口信・佐々木昭一郎氏

★ぼくは目下、YOTAのデスクの上でスクラップを切ったりはったりしております。YOTAとMiMiZuKuは、となりでセッセとコピイをとっております。岡本博氏の映像時評は、やむなく最下段を削りました。あしからず。（11／7 YOTA宅にて・MAO）

フィクション・テレビ・フィルム
—ドラマ「夢の島少女」制作メモから—

葛 城 哲 郎

この番組は，時代が，そして，人々が，「捨てている」ものの中に，形而上的な因果関係を求めた演出者の空想から生れたものです。それは，都会の波の中で，誰も目にとめようとしない，汗を流し呼吸するある少女の孤独と絶望の「記憶」の中に，「その生きながら死んでいる」少女の再生と再び訪れる「死」の中に，そして少女と少年の「出会い」と「愛」の中に収斂される「失くしてしまった，いちばん大切なもの」への永遠の追求とでもいったものです。「番組解説用パンフレット」から

演出の佐々木（昭）ディレクターと台本担当の鈴木志郎康氏が“ちょっと話があるから”と顔を出したのは，NHK 放送センター 10 階にある，狭苦しいフィルム編集室の一室だった。昭和 49 年2月，そのとき私は，明るい農村“村の記録”——睦合村出稼ぎ年表——という番組の編集に没頭していた。

少女の身売り，出征，出稼ぎという形で，村を連れ出され，引き立てられ，大都会に吸いこまれた挙句，二度とふたたび，生きて故郷の土を踏むことのなかった農民の歴史を，“年表”という形式で記録し，かれらをこのような運命に追いこみつづけているものへの告発と抵抗の文集としてまとめ上げた，一中学校教師と，その文集が番組のモチーフとなっていた。

番組は，睦合村在住の女子高校2年生を“かたりべ”として登場させるとともに，年表追跡の中に彼女自身のイメージをダブらせていくという構成方法をとり，さらにトークのほか，詩，わらべうた，音楽などの音声テープも同時にダブル編集をしていったために，その作業は，かなり“腕力”のいるものであった。

しかし私は，担当ディレクターの真摯で粘り強い態度に牽引され，番組のイメージにあまりに強く結びつけられていたので，ドラマの打合わせに現れた二人の話を聞いていても，このドキュメンタリー番組の続編をつくるような気分を変えることができなかった。ディレクターが少女について語り，台本担当者が東北の風土について語った，ということもあるかもしれないが，それは，ごく自然な成行きなのだった。

テレビ局で働いているフィルム・カメラマンとして考えてみると，こうした経験は，別に珍しいことではないと思う。むしろ私は，この気持を持続し，ドラマへ持ちこみたいとさえ思っていた。私は“次の仕事はドラマだ”と気持を切りかえて，下見や顔合わせ，衣裳合わせといった，テレビ番組づくりのスケジュールに従った型に引きづりこまれることを恐れていたのかもしれない。“いわゆるドキュメンタリー・タッチ”のやせ細ったリアリズムや，滑走路のように整序された快感はあっても，見事に自己を塗りこめた，汚れなきドラマ，登場人物の緊張関係を強調するあまり，ストーリィの劇的展開がどうなるかということへ，結局いってしまうドラマも乗り気しなかった。もっと自分の気分をササくれ立たせることによって，カメラマンとしての感性のしなやかさ，のびやかさを，充分に私の肉体に満たしておきたかったのかもしれない。

もちろん私は，同じ演出者と体験した2作「おはようぼくの海（マザー）」（昭和 44 年），「さすらい」（昭和 46 年）を意識している。しかし，“テレビに適した方法”というコトバが待ちうけている陥穽にはまることだけは，絶対に避けたいと，かたくなに心に決めていた……。

筆者：NHK近畿本部映画班

「少女を待つ間」

ともかくロケハンをはじめてくれ，という指令が出たのは，三月初旬だった。出演者は決定していなかった。脚本も未完成で，私の知らされていることといえば，少女，夢の島——東京，そして東北のどこか，ということだけなのだ。夢の島は，他の番組で何度も行ったことがあり，掌を指すように承知している。ためらうことなく，私は東北へ向うことにした。また“村の記録”の上田ディレクターから，「陸合村から更に北へ行ってみてはどうか，いわゆる北秋へ」と提言され，大館，能代，五能線経由で弘前までを予定して，3月14日，上野駅をひとりで出発した。

大館周辺の小坂鉱山，花岡鉱山を手はじめに，能代から八森町まで行ったところで，五能線を下ってきた演出補と合流した。私たちは，いろんな人と会い，数多くの場所へ出かけたが，いつの間にか八森町，そして五能線沿いの海岸の風景に，すっかり心を奪われており，夢の島に対置されるべき現実の土地として，いつの間にか自明となっていた。山は大きく海岸線にせり出す。細長くどこまでも続き，途切れては現われる集落。トンネルや鉄橋で，かろうじて縫うように走っている線路。海岸の黒い砂と漁具小屋。斜面にしがみつくようにして，いたるところに立つ墓石。漁期を過ぎて，静まりかえっている小漁港，その突堤に立ってふり仰ぐと，古電池分解工場の煙突から，ゆっくりと黒い煙が立ち上っている。

鈍色の海と灰色に沈む集落の大ロングを眺めつつ，私は，ようやく溶けはじめた雪の下から，畑に埋められたはずの大量のハタハタの残骸を見つけている。

踊りの好きな老女や，中学校のバスケット・ボールの選手とも顔見知りになり，細い露地も歩けるようになった。これはシナリオに基づくロケハンではなく，シナリオのための取材でもないのだった。演出補は，もしここでロケが行なわれる場合に備えて，いろいろな手を打っているようであった。

「少女を待つ間」私はこうして，演出者の演出方法に十分対抗できるように，私なりのやり方で時を過ごした。佐々木ディレクターの作品では，台本の設定にふさわしい場所を探してくるのがロケハンではない。

彼はあてはめることをしない。人間でも土地でも，何かを発見すれば，そこからはじまるのだ。従って，八森町では何がどう起るか予定できない。演出補の努力の大部分は水泡に帰すかもしれない。しかしともかく，演出者と出演者の間に何かが起こった時，私は間髪を入れず，それを記録しなければならないのだ。

「一回性でしかとらえられない出会いの一瞬のきらめき，そこで交される，さり気ない言葉，人が確実に生きているという息づかい，それらをすくいあげることが，われわれの最大の目的であった。それはカメラとの出会いであり，スタッフとの出会いでもあった。こうしたわれわれの感覚が，どう伝わったか——それは窓の向こうに，つまりノゾキからくりの向う側に，想像する世界を持っている視聴者だけに伝わる感覚だと思う……」
（S47・3・29 読売新聞 佐々木昭一郎「さすらい人の世界」）より。

前回のドラマを，こうして総括した演出者は，次に少女を主人公とし，詩人を共同作業者に引き入れることによって，既成のドラマへの疑問を洗い直しているはずであった。ラジオ・ドラマ（昭和38年“都会の二つの顔”，40年“コメット・イケヤ”，41年“おはようインディア”）以来，過去に結実した番組の方法論を超えて，スタッフの出会いの一回性，送りっ放しの放送の一回性に，大胆にも，さらに一歩踏みこんだ展開を意図しているようであった。

主人公の少女を探し出すのに，ふたりが大きなエネルギーを注いでいるのを見ても，私には油断のならぬことであったのだ。次にロケで八森町を訪れる時には雪は消えているだろう，あの発電所の廃屋と中学校の背景を大きく占めている山は，一面の新緑におおわれているはずだ。八森町を去る日まで，私は少女の幻影におびえながら，際限のない想像をめぐらしていた。

「息裂けよ　少女」

帰京してみると，案の定，少女探しはつづけられていたが，スタッフは次第に集結しつつあった。各自の持ち寄った資料（人物，場所，技術上の問題点から，番組の考え方など全て）は提出され，討論された。

スタッフは，演出，演出助手，台本，美術，効果，録音（2名），撮影の計8名，ポイントになる打合わせには，制作担当管理職が必ず出席していた。

幾人もの少女が，現われては消えた。主人公となるべき生身の少女は，未だスタッフの前に姿を現していないというのに，内容については煮詰められていくということは，かなり危険を伴うことはたしかである。演出者のドキュメンタリーの方法への強い関心を思えば，なお更のことなのだ。

文章に表現されたストーリィやせりふの意味が，人間対人間，人間対物の関係を，即自的にブラウン管の中へ映し出すという錯覚からは，スタッフは解き放たれているはずであったし，演出者のイメージするものが結局は番組を支配していくということの意味もまた，あいまいにしておくことなく，製作過程の中で，スタッフ自らが明らかにすべきことであった。

かくして，演出者と台本担当者に対する他のスタッフの関係は明確であった。この番組のために確保されたフィルム編集室をアジトにして，私たちは連絡をとり合い，打ち合わせを重ね，可能な限りの準備をしていた。しかし，「少女」が現われてくれないことには，何も始まらないこともたしかなのだった。

4月から5月にかけて，初稿にもとづく予備的な撮影のために，少編成のスタッフで東北を旅したある朝私は早起きしすぎたのを悔みながら，洗面所から自分の部屋へ戻ろうとして，ジーンズに長髪の少年が，ドアをノックしているのを発見した。こんな早朝に，といぶかしく問う私にふりむいたのは，まぎれもなくケン．横倉健児（17才）（44年“マザー”の主人公）だった。夜行列車で今着いたばかりだということ，高校は中退していること，何か手伝うことがあれば，ということなど，照れ臭そうにしゃべっていた。彼とは6年ぶりの再会であったが，佐々木ディレクターが彼を相手役として選んだことは明らかだった。ケンは他のスタッフともすぐに打ち解けていった。

私には，ケンの無邪気さ，純粋さは“マザー”のころと少しも変っていないように見えたが，何かしら，こわれやすくナイーブな17才の彼は，すでにひそかに「少女」が選ばれていることを直感させた。

それは，完全に納得のいく少女が立ち現われるまでは本格的な撮影は始まらないだろう，期限までに彼女が現われなければ，制作は中止となるだろう，もう代役はきかないのだから，ということであった。

佐々木ディレクターと鈴木志郎康氏が，駅のホームや女学校の門の前で，あてどなく少女を探した時は過ぎて，今や，誰を選ぶかが全面的に佐々木ディレクターにゆだねられていた。彼の一挙手一投足に息を呑む思いで待つうちに，「息裂けよ 少女」と仮題された決定稿台本が上っていた。

ロケの現場では，ズボンのポケットに突っこみ，時折りとり出してはチェックする，といった体の台本では，これはない。もとより，そのような意図に沿って書かれたものではないからだ。時空を超えた，不思議な少女の旅の物語である。基本的な状況設定や，人物の動きは，打合わせの結果が生かされていた。

オール・ロケは既定の方針だったので，台本に従って，ロケ地の必要な交渉や，大まかなスケジュール作成は，すでに終っていた。しかし，それらは何度も組みかえられた。息裂けそうなのは，少女でなくスタッフの方であった。

「小　夜　子」

5月27日，見切り発車のロケ開始。人形工場他。28日，ついに「少女」の出現，全スタッフと会う。

「私は，出会った瞬間に，この番組の中に在る，ほとんどのシーンの状況設定を考えつきました。

このような体験は，これまでの作品では，全く考えられなかったことです。（略）私は，これまでの経験の上に立って，彼女に，どのような状況を設定すればよいのか，その可能性の大きな事を直感的に判断しました。（略）赤いワンピースの少女が，ある日突然，東京の町に現れて，人々の間を点在し，夢の島に消えて行く——という私の中にあった甘いセンチメンタルな空想を捨てて，まだ，カメラとマイクによってとらえられたことのないこの少女を，アルプスの少女ハイジやシンデレラのような美しいばかりの永遠の少女ではなしに，この東京の荒波の中に放出され，コミットされていくプロセスをとらえることによって，中尾さん自身の中にある，開かれない，故に“透明な魂”といったものをくっきりと描き出したい，と考えたのでした」（番組解説パンフから，佐々木ディレクターの文章）。

〈少女〉は，撮影期限ぎりぎりに姿を現わした。ジーンズにお下げ髪の，中尾幸代さん，17才，高三。いよいよはじまりである。私たちは雪崩れをうって撮影に突入した。

小夜子とケンと，演出者を遠まきにし，ある時は接近し，ワイヤレスマイクと同時録音カメラを手がかりにして，日に夜をついで撮影した。

第1回　東京　6日間
第2回　秋田　8日間
第3回　東京　9日間

スタッフは自分の趣味にかかわっていることはできなかった。盆栽いじりをしているわけではないのだった。自己のアリバイをつくる，余裕も必要もなかった。私は，いままでこのように早く走ったことはないが，それが可能だったのは，多忙なテレビ局のフィルム・カメラマンとして，己の肉体をそのように馴致させてきた結果では，決してない。

「スタッフについて」

佐々木「今度の主役の中尾さんは，この正月から探し歩いた約300人の中から，自分で選びました。(略)その時に「夢の島少女」の構想も決った。そのため，鈴木さんの台本も即興的に，どんどん変えていってしまったわけですが……」
——「鈴木さん，その間の"事情"について」
鈴木「面白かったですよ。演出は具体的なものであって途中で新しい要因が入ってくるわけですから，演出者によって台本が改変をこうむるのは当然だと思いますね。(略)」
(昭和49年7月10日毎日新聞夕刊より)

演出者は，書かれたコトバを出演者との関係の中で洗い出してこそ，現実の生きた断面を切り取っていけるのだという強い姿勢に貫かれている。従って彼が呼吸しあえる近さにいない出演者は信じないし，また呼吸しあうためには，いくらでも時間をかけるのだ。スタッフは忍耐づよくその瞬間を待ち伏せしなければならない。ある時は，その瞬間は怒濤のように押し寄せまたある時は，唇のわななき，瞳の一瞬のかげりさえも捕捉することを要求する。演出者の関心は，生きざま，そのものであって，ストーリィの背後に隠されている黒々としたものを引き出したとたん，具体的な少女の運命は切り捨てられてしまうのだ。しかし，演出者は，映像をストーリィの文脈から切り離そうとし，一元的，固定的なものでなく，自立したものとして存在させようとしてきた。従って，この番組に参加したスタッフは，演出者のイメージの運び屋であることによるアリバイは成立しないのだ。これまでのスタッフの関係との相違は，ここにある。スタッフと出演者と

の関係もまた変化し，全体がゆるやかな，ひとつのまとまりを示しはじめるとき，演出者への服従という関係は消滅する。

「空中撮影」

「(略)今回の飛行で，私が最も感動したのは，人間を撮るための低空飛行だからでした。先ず少年を紹介され，ついで少女を紹介され，私はいっぺんに二人と仲良しになりました。永いパイロット生活で，出演者を紹介されたのは，はじめてのことでした。「少年が少女を背負って夢の島を歩くのを出来るだけ低空で撮りたい」と言うカメラマンの要求を聞いて，私は，この制作者たちが何をしようとしているのか，その意図をいっぺんに理解することができました。私は，操縦桿に念力をこめて，地上50センチから30センチの低空に耐えました(略)」
(全日空パイロット　畝木宣尹氏)

KH-4にエアロビジョンを搭載しての撮影は，25分間で終ったが，あのローターが風を切る音には，抗い難く浮き足だって，ラッシュを見ては後悔するのが常なのだが，畝木パイロットにリードされて，ここでは十分所期の目的を果すことができたと思う。

ロケも終りに近く，悪天候が続いて，私は焦っていた。しかも重要なラスト・シーン，空港の進入灯が，すぐ近くに見えるし，テストでは，ゴミや板片が激しく舞い上っていて，私は不安だった。しかし夢の島の空間は，正に，彼と彼の手足のように動くKH-4のために存在させられているかのようなのだ。

ヘリは上昇し，カット!! OK!! のサインを送った時彼はうなづき，微笑みながら下を指さした。赤いドレスの少女を背負った少年は，よろけながらもまだ一心に歩いていた。私は，四肢の延長として，このようにエネルギーを効果的に集中して機械を操る人を，まだ見たことがない。

「クランク・アップの日」

ある日，あるとき，ある日曜日の朝，
ひとびとは，深い眠りの中にいます。

ひとびとは，思い出そうとしています。
——失くしてしまった，いちばん大切なものを——
（放送台本から）

6月29日，雨。朝まだきの渋谷，街を放浪する少女を撮影して，すべてのロケ予定が終了した。

少女と演出，録音，撮影の3人のスタッフは，開いたばかりの喫茶店に入っていた。

少女は，じっとりと濡れた濃紺のワンピースが，自然に乾いていくのを待つかのように，静かに椅子に腰を下していた。撮影は終った。これで私たちの責務の大半は果せたのだ。しかし，私たちは長時間ドラマのクランク・アップにふさわしい，解き放たれた，明るい挨拶を交すこともなく，また「お疲れさん」と，ほかの誰かから声をかけられることもなく，追いつめられた四匹の濡れネズミのように，黙りこくって，熱いコーヒーをすすっていた。

ちょうど1年後の今，私は，神戸市生田区諏訪山上にある，「ヴィーナス・ロード」と呼ばれる，展望用遊歩道にいる。須磨，垂水の山稜から，中突堤とポート・タワーが，背景に白い船群を従えて，ぐぐっとせり上るように迫って見える。貿易センター・ビルと組んで，神戸大橋，ポート・アイランドが，見事に構図に収っている。

私は10月からはじまる，朝のテレビ小説「おはようさん」のフィルム・ロケに来ているのだ。若いふたりの，ほのかなふれあいのシーンである。32才の演出者は，27才の演出補とたがいにコンテをたしかめあって撮りすすんでいる。私たちはこの山へ上る途中ですでに2シーンを撮ってきた。港のシーンは，昨日の夕方撮り終えている。インサート・フィルムということもあり，私も気楽なものなのだ。

私の眼前には，6年前に担当したドラマ「マザー」の，ほとんどの現場が手にとるように見えている。

「マザー」，「さすらい」，「夢の島少女」まで，今思えば，そのときのすべての時間は停止して，私の会った人々の優しさだけが漂ひ出してくるようにみえる。私が通ってきたのが，素晴しいフィクションの世界だったからであろうか。

≪使用機材≫
カメラ：アリフレックス 16S
　　エクレール NPR
レンズ：アンジェニュー 5.9mm
　　シネゴン 10mm
　　アンジェニュー 12〜120mm ズーム
　　〃　　12〜240mm ズーム
フィルム：EK 7254

永遠のカノン。

ドシラソファミレド 唄って下さい。
ドシラソファミレドに 和音を付加して下さい。

4/4
ドシラソファミファソ
ミレドシラソラシ

「カノン」はエンドレスです。宇宙に終りがないように、
カノンに終りはないのです。
私が見つけた、私のカノン……「夢の島少女」。

佐系記。

この人を…

人間が好きで人間を描く

今、若者たちの間で、静かにそして熱っぽく語りつがれている演出家がNHKにいる。

四月三日放送『土曜ドラマ劇画シリーズ・紅い花』の佐々木昭一郎氏が〝話題〟の主。各地で学生サークルなどが、よく彼とその作品についての〝研究〟をしているが、そのなかでも出色なのは、豊橋の学生が出しているミニコミ誌「日曜日にはTVを消せ」。二年前の創刊の動機が、「佐々木昭一郎というNHKのディレクターが作った『夢の島少女』を見て、ひどく感動、その勢いで——」という熱のいれよう。〝三無主義〟といわれて久しい現代の若者の魂をゆさぶる、佐々木昭一郎ってナンだろう？

昭和十一年七月二十五日東京生まれ。昭和三十八年ラジオドラマ『都会の二つの顔』（ラジオ・テレビ記者会賞）でデビュー。その後もラジオ畑で『コメット・イケヤ』（一九六六年度イタリア賞グランプリ）、『おはようインディア』（昭和四十一年度芸術祭賞）、テレビに移ってからは、『マザー』（一九七〇年度モンテカルロ国際テレビ祭最高賞）、『さすらい』（昭和四十六年度芸術祭大賞）、『夢の島少女』とドキュメンタリーふうな独自の手法でカクカクたる成功をおさめてきた。そして今年の『紅い花』——それは〝私〟がとある町角で時の流れをさかのぼり、内面の風景に旅する映像のメルヘンだった。空襲で死んだ妹のイメージと重なる少女との出会い、慕情……。

個人の気ままであるべき〝旅情〟さえも旅行業者にたやすく〝パック化〟されてしまう現代へのアンチテーゼ。

「現代は詩を失った時代なのかもしれません。神経症的に書された管理社会、その中でひとりひとりはだれもが自分の通り過ぎてきた過去の風景を愛惜しながら生きているのでしょうが」

口ごもり気味にいう彼のことばの端々に〝人間が好き、人間を見つめ、描くことが大好き〟というやさしさがある。

「そう、とてもやさしい方なんです。紳士的で謙虚なの。私は十日間ほどのおつきあいだったんですが、自分の内に対して激しく燃焼してる方です。私程度の役者にも〝ボクなんか役者さんを呼び出せるがらじゃないんですが〟なんておっしゃるの」

（『紅い花』のキクチサヨコ役の沢井桃子）

中学のころ、仙台と大宮の間でヤミ米のかつぎ屋をやり、仙台駅でつかまり、卒業するころ、通訳を志し英語塾に通った。ところが、教師のあやしげなふるまいに閉口してアメリカの夢からさめた。その後、高校に入り、転校を重ねること五回、貿易商を志して立大経済学部を卒業。今度は「片親だったもんで、商社がこころよく思わなかったようです」で挫折。

これまで、千本以上の番組に助手として立ち合っている。演出したほとんどの番組が必ず大きな反響をよんでいるわりには寡作である。〝みなさまのNHK〟の看板に、NHK自身がそのあまりの陳腐なひびきに失笑している今、彼はもっとも〝みなさま〟に誠実なアルチザンといえるだろう。

少年のような激しいやさしさと、透き通った熱情で〝人間〟を見つめる彼、「星の王子さま」ふうにいえば〝子供であったことを忘れずにいるおとなはいくらもいない〟が、佐々木昭一郎は少年の心を持ちつづける〝いくらもいない〟側のおとなのかもしれない。（S）

パパとママ

高間恭子

「父について、具体的な思い出ってないんです。亡くなったのが私が小学二年生の時だし……。でも、強いて父のイメージっていえば、小さな時から〝大好き〟ということばに集約されるみたい……」NHK『ゲーム・ホントにホント？』で、四月からアシスタントをつとめる高間恭子の語る〝父・高見順（作家・故人）〟である。

昭和三十四年一月、東京・代々木の生まれ。十八歳。高校時代からモデルクラブに属し、もっぱら、資生堂の「花椿」などに出ていた。身長168センチ、サイズはB82センチ、W58センチ、H84センチ。

——ホントかな、ときいたら、「身長だけはね」とつぶやく。

現在、片思いの相手がふたり。「わりに簡単に好きになるのよ。田村正和みたいな、不思議な魅力のある人が理想なの。でも、すごくアキっぽいから一週間くらいしか続かないの」

趣味はソウルやロックのレコード鑑賞、アングラ演劇を見にゆくこと。それから友達とあちこち食べ歩くことだそうだ。ことし、和光大学国文科に入学、ぼっぼつ「高見順日記」などを読み始めている。（文）

1976.6.25

TEST PATTERN

10／26（火）ほとんど徹夜で荷造り。豊橋駅から大塚駅留めで荷物を発送。夕方、東京着。

10／27（水）MiMiZUKUと共に不動産屋の案内でアパート探し。ひどい部屋ばかりで夢も希望も失せかける。

10／28（木）高田馬場「タンタン」という主に学生相手の不動産屋で紹介された富士見台のアパートを見に行く。

10／29（金）アパートも決まったので、高円寺のコーン・フィールドへあいさつに行く。ワ年ぶりに高校時代の同級生に出くわす。

10／30（土）「タンタン」で正式に大家と契約。またほとんど徹夜でMiMiZUKUの荷造り。

10／31（日）佐々木肇君に引っこしの手伝いを頼み池袋パルコで待ち合わせたが、どういうわけか互いに迷子になって会えず。予定より早く運送屋が来たので見切り発車。大塚駅でぼくの荷物をのせてから富士見台へ。部屋の中いっぱいに荷物を並べて、とにかく引っこしは完了。

11／7（日）明け方までミニコミ編集。少しスイミンをとり決死的早起きして、小田急で新松田まで。YOTAが車で迎えに来てくれる。YOTAとMiMiZUKUとぼくと、三人がかりでミニコミの残りのページをコピイ。佐々木昭一郎さんからTEL。川本三郎さんへTEL。

▼という次第で、今号は、豊橋とYOTA宅と東京で、編集と印刷を行ない、PHC史上空前絶後の超大冊が出来上がったのだ。ほんの一部しかここでは使えなかったけれど、資料を提供してくれたみなさんありがとう。複写朴とコピイ用紙を提供してくれたYOTAさんには、結局制作費の半分を負担してもらったわけで、本当に助かりました。

▼菖城哲郎カメラマンの制作メモは、他のページと逆に読んで下さい。このメモは「映画テレビ技術」誌75年8月号からのコピイです。

▼今号の編集をはじめた頃から考えていたことですが、「日旺日」MAO版は、これをもって、一応、休刊とします。YOTA版の方は、順調とは云い難いけれど、まだ続きそうなので、ぼくも少しは手伝えると思います。

▼新居は、西武池袋線、富士見台下車、南口から徒歩8分。目と鼻の先に、虫プロの大きな建物があるのだ。昔、虫プロをクビになった村野守美も、富士見台にいるそうな。

▼引っこし後に届いた郵便物は佐々木さんから「紅い花」の台本とインドのおみやげ、加藤岡本とインドのおみやげ、加藤岡也、山内豊さんからハガキ、平田泰海陽子さんから「デイ・ドリーム通信」祥君から「斉藤等君からアメリカ製TVムービーへ73年まで」そして、ほとんどすべてをモウラした自作の大冊パンフレット、をいただきました。ありがとう。

（11／14）

東京都練馬区富士見台2の25の11（アパート名なし・デンワもなし）〒177
藤田眞男（MAO）
小石秀子（MiMiZUKU）